

福井県埋蔵文化財調査報告 第17集

領 家 遺 跡

—一般県道領家河和田線改良工事に伴う発掘調査—

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

今立町は、越前南部の南越盆地東の谷間にあり、継体天皇の伝説が各所に残るように歴史が偲ばれる町です。古来よりの歴史は遺跡として町内各所にあります。

今回報告する領家遺跡は、今立町の服間谷と山を隔てた鯖江市の河和田地区を結ぶ県道の河和田・領家トンネルの坑口にあたり、工事の中でも優先される箇所でした。当時の福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、県内各所で発掘調査を展開しており、領家遺跡の調査に早急には対応しかねる状態にありました。この中でこれまでも発掘調査を実施していた地元今立町教育委員会に発掘調査を依頼したところ快諾をいただき、昭和63年から平成2年の3ヵ年にわたって調査されました。

遺跡のある「領家」の地名は古代から中世にかけての荘園制度に関するものです。今回の調査ではこのことに関わる知見は得ることができませんでしたが、古代の土器が多数出土しました。また、縄文時代の土器や古墳時代初頭の竪穴住居跡が検出され、事前の想定を大きく超える成果を得ました。

本報告書でまとめられた成果が、今後の周辺での発掘調査に活かされるとともに、丹南地区に埋もれている遺跡についての理解が深まるものと考えております。

最後になりましたが、今立町教育委員会を始め、作業に従事していただいた地元の皆様と関係者のご協力に感謝いたします。

平成20年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、県道243号領家・河和田線改良工事に伴い、昭和63年度から平成2年度までに発掘調査をした領家遺跡の調査報告書である。
2. 領家遺跡の発掘調査は、福井県今立土木事務所の依頼を受け、現地調査を今立町教育委員会が担当し、遺物整理を福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 現地調査は、昭和63年9月8日から平成元年11月20日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの赤澤徳明の協力を得て今立町教育委員会的小林博之が担当した。遺物整理は、平成2年4月1日から平成3年3月31日まで福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで実施した。
4. 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章を小林博之が、第Ⅴ・Ⅵ章を赤澤徳明が行い、第Ⅴ章第4節尖頭器を福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの富山正明が担当した。その他の執筆と編集は、赤澤徳明が行った。
5. 報告書に使用した第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章の挿図は小林博之が、第Ⅴ章第4節尖頭器の挿図は富山正明が図化し、その他は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの作業員の協力を得て赤澤徳明が行った。
6. 発掘調査及び遺物整理に際しては、福井県今立土木事務所の協力を得た。
7. 本書の挿図の縮尺は各図に明示した。
8. 本書の水平レベルは海拔高で表示し、方位は真北(T.N)を用いた。
9. 写真図版の写真右側にある番号は挿図にある個々の土器番号を示す。例えば「13-1」とあれば「第13図1」の土器の写真であることを示す。
10. 調査で得た遺物および図、写真は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。
11. 報告書の作成にあたり次の方々には、特にご教示いただいた。

石川日出志（明治大学）、佐藤由紀男（浜松市教育委員会）、豆谷和之（山口大学大学院）

この報告書は、本来ならば平成2年度に刊行する予定でしたが、諸般の事情により遅延し、今日に至りました。

なお、報告書原稿は、すでに執筆されている部分もあることから、混乱を避けるため当時の内容で執筆を進めました。そのため、現在の見解とは一致しない部分もあります。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 発掘調査	12
日誌抄	12
第Ⅳ章 検出遺構	15
第1節 住居跡	15
第2節 溝状遺構	18
第3節 柱穴群	18
第4節 土器棺墓	19
第Ⅴ章 出土遺物	20
第1節 弥生土器・古式土師器	20
第2節 古代の土師器	27
第3節 須恵器	30
第4節 その他の遺物	41
第5節 縄文土器	42
第Ⅵ章 まとめ	50

挿図目次

第1図 試掘調査位地図及び土層略図	2	第2図 今立町の位置図	3
第3図 今立町内遺跡分布図	6	第4図 調査区グリッド配置図	12
第5図 遺構配置図	15	第6図 1号住居跡遺構図	16
第7図 1号住居跡遺物出土状況図	17	第8図 2号住居跡遺構図	17
第9図 1号溝状遺構図	18	第10図 2号溝状遺構図	18
第11図 3号溝状遺構図	18	第12図 土器棺出土状況図	19
第13図 弥生土器・古式土師器実測図	21	第14図 弥生土器・古式土師器実測図	22
第15図 弥生土器・古式土師器実測図	23	第16図 弥生土器・古式土師器実測図	24
第17図 弥生土器・古式土師器実測図	25	第18図 弥生土器・古式土師器実測図	26
第19図 古代の土師器実測図	28	第20図 古代の土師器実測図	29
第21図 須恵器実測図	30	第22図 須恵器実測図	32
第23図 須恵器実測図	33	第24図 須恵器実測図	34
第25図 須恵器実測図	35	第26図 須恵器実測図	36
第27図 須恵器実測図	37	第28図 須恵器実測図	38
第29図 須恵器実測図	39	第30図 須恵器実測図	40

第31図	須恵器実測図	41	第32図	紡錘車実測図	41
第33図	尖頭器実測図	42	第34図	尖頭器出土状況図	42
第35図	土器棺出土縄文土器実測図	43	第36図	包含層出土縄文土器実測図	44
第37図	1号住居跡出土の同時期と判断される土器群				

挿 図 目 次

図版 一 遺跡	①遠景（西の服間小学校校舎屋上から東北側を望む） ②近景（南西側の農道脇より望む）
図版 二 遺構	①調査区北側の29F～30Iグリッド付近（南から） ②24C～24Fグリッド、1号住居跡付近（東から）
図版 三 遺構	①26Hグリッド付近、2・3号溝状遺構とピット群（南から） ②調査区北側28F・29Gグリッド、2号住居跡付近（南から）
図版 四 遺構	①調査区南側、2E・3F～11E・11F付近の完掘状況（南から） ②調査区中央、15E・F・G～24E・F・G付近の完掘状況（南から）
図版 五 遺構	①24Dグリッド、1号住居跡の拡張前の完掘状況（南東から） ②4Fグリッド、須恵器出土状況（南から）
図版 六 遺構	①24C・24Dグリッド、1号住居跡の拡張後の完掘状況（北東から） ②1号住居跡の古式土師器出土状況（北東から）
図版 七 遺構	①28F・29Gグリッド、2号住居跡の完掘状況（南から） ②23Iグリッド付近、ピット群（南から）
図版 八 遺構	①土器棺の出土状況（南から） ②土器棺の出土状況（東から）
図版 九 遺物	弥生土器・古式土師器
図版 十 遺物	弥生土器・古式土師器
図版十一遺物	弥生土器・古式土師器
図版十二遺物	弥生土器・古式土師器と古代の土師器
図版十三遺物	古代の土師器・須恵器
図版十四遺物	須恵器
図版十五遺物	須恵器
図版十六遺物	須恵器

表 目 次

第1表	今立町内遺跡分布一覧表	7
第2表	縄文土器出土区層位一覧表	44
第3表	遺物観察表 弥生土器・古式土師器・古代の土師器	45
第4表	遺物観察表 須恵器	47

第1章 調査に至る経緯

今立町領家と鯖江市河和田を結ぶ県道243号領家河和田線の領家・河和田トンネルは、今立町の越前和紙の里と鯖江市河和田の越前漆器会館、さらに福井市の一乗谷朝倉氏遺跡から三国町の東尋坊や永平寺町の永平寺に抜ける広域観光ルートとして期待されるもので、昭和48年にトンネル建設の期成同盟会が発足した。計画は、延長498m（幅員9.25m、片側に歩道）で領家側に170m、河和田側に90mの取り付け道路が設けられる予定であった。そのため、両取り付け道路に係る埋蔵文化財の有無について県今立土木事務所より県教育委員会に照会があり、県埋蔵文化財調査センターでは、今立町領家側の取り付け道路予定地（約4100㎡）について、昭和63年6月13日～29日に試掘調査（約110㎡）を実施した。

調査は、工事予定地内の任意の位置に、規模が異なる8か所のトレンチと2m×2mのグリッド7か所を設定し、順次実施した。

調査の結果、ほとんどの調査区において、土器を含む遺物包含層である黒褐色土層を検出した。特に4グリッド（南壁）においては赤色の焼土からなる「炉跡」を、1グリッドと8トレンチ（東壁）においてはそれぞれ「柱穴」を検出した。出土した遺物は、大部分が奈良・平安時代の土器が占めるが、5グリッド・5トレンチでは弥生土器が混在しているため、2時期の集落が存在していることが想定された。

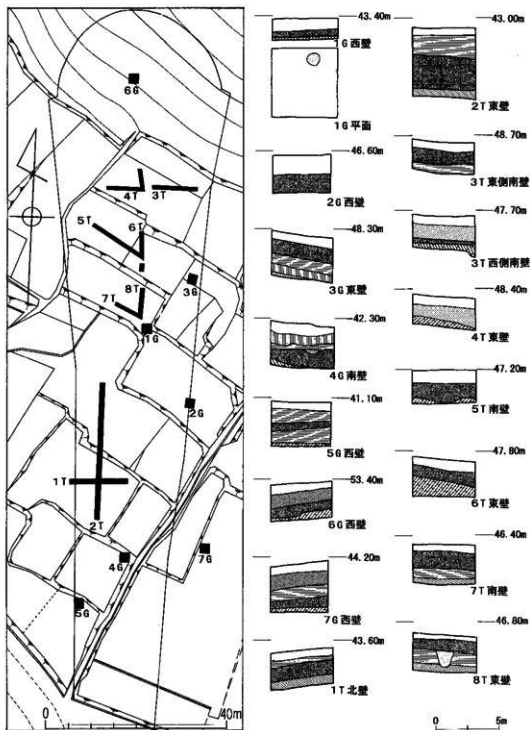
以上のことから、工事予定地内に遺跡が存在することは間違いなく、その推定面積も約15000㎡に及ぶことが判明し、今後工事が施工されれば、遺跡の現状での保存は困難であるため、何らかの対処が必要であることがわかった。

この報告を受けて県教育委員会と県今立土木事務所が再度協議を行った結果、既に用地等の取得も終了し、さらに少しでも早い道路の完成を住民が望んでいることから、計画の変更による遺跡の現状保存は困難であり、発掘調査による記録保存とすることに決定した。

県埋蔵文化財調査センターは、発掘調査を実施するにあたり、地元今立町教育委員会に調査協力を依頼し、同町歴史民俗資料館の協力のもと調査体制を整えた。

調査は、排土搬出の都合上3ヵ年の継続事業とし、初年度に標高の低い南側（道路側）から順次約1600㎡を、次年度に残り2300㎡の調査と遺物整理作業、最終年度に遺物整理作業と報告書刊行の計画をたて、諸準備を行ったうえで平成63年9月1日より調査に着手した。

このように、開発計画が実行される直前に、埋蔵文化財の調査をおこなわなければならないことは、事前に積極的な埋蔵文化財の周知を行わなかった我々文化財保護行政側が反省しなければならないことである。しかし、開発側の埋蔵文化財に対する認識不足にも反省を求めたい。さらに遺跡分布地図等の不備も痛感した。今後は、分布地図等の整備が急務であり、かつ、行政内での連絡を密にして二度とこのようなことが行われなくなればならない。



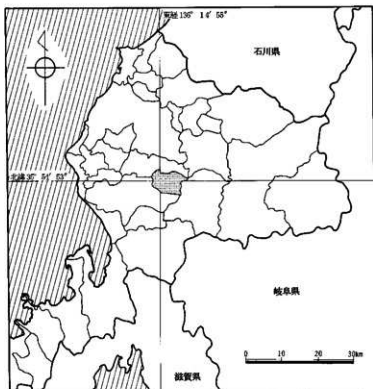
第1図 試掘調査位地図及び土層略図

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

今立郡今立町は、福井県嶺北地方のほぼ中央にあり、東経136° 14' 55" 北緯35° 54' 53" の位置で、東側は今立郡池田町と南及び西側は武生市と、北及び北西側は鯖江市と接する。武生市、鯖江市との境は、独立丘「三里山」をもってその境としている。

嶺北地方には、日野川によって形成された福武低地があり、その南部は鯖武（鯖江・武生）盆地と呼ばれている。鯖武盆地には、長泉寺山・王山・村国山・茶臼山・岩内山・愛宕山・三里山など、海拔60m～340mの大小の独立丘が点在してい



第2図 今立町の位置図

る。これら独立丘の周辺は、日野川をはじめとする諸河川によって形成された扇状地や沖積地となっており、古くから耕作地として利用されている。

現在の今立町は、昭和31年に町村合併によって成立した。今立郡は、弘仁14年（823）に、日野川以東をもって丹生郡から独立して以来、約1100年もの長い間呼称されてきたが、一部は武生市へ、一部は鯖江市へ編入され、現在の今立町、池田町の2町に縮小されたのである。

今立町域は、福井県嶺北地方のほぼ中央に位置しており、東西約10km、南北約6.5kmの広がりを持ち、東は今立郡池田町と、北及び北西は鯖江市と、南及び西側は武生市と接し、その外形は東西に長い短矩形を呈している。

現在は、栗田部、岡本、南中山、服間の4地区に分けられ、その地形は、山地・扇状地・谷底平野の3つに大別できる。このうち南中山地区の谷底平野は、町内を流れる鞍谷川・服部川・月尾川によって形成され、南北約2km、東西約1kmの広がりをもつ。今回調査を行なった領家遺跡

は、これら谷底平野を形成する河川の一つ、服部川が形成する通称服部谷のほぼ中央で川の右岸に広がる山裾に存在している。

町の面積は、48.08km²で、東西に10km、南北に6.5kmの広がりを持ち、町域には、西方に三里山、東方には池田町へと続く山麓が町を囲むように連なる。主な主嶺としては、権現山（565m）、大谷山（448.2m）、行司ヶ岳（309.7m）などがあり、標高500m前後の尾根を中心に、全体としては西又は北西に向かって次第に高度を減じている。これらの山々は、侵食がかなり進んでいるために、変化に富む景観を呈している。また、平野部は、服部川・水間川・月尾川によって形成された服部谷・水間谷・月尾谷と、この3河川が流れ込み、さらに三里山東側裾を流れる鞍谷川と合流するところの広大な谷底平野からなる。そして、現在はその谷底平野のほとんどが水田として利用されている。

このような町内には、4河川によって形成された谷底平野と、山地の谷間に生じた多数の小規模な扇状地の存在は、古代の人々にとって居住地としての条件を満たしていたと思われる、そのため、周辺には縄文時代から平安時代にかけての各時代の遺跡が分布し、且つ、遺物の散布も多く見ることができる。

領家遺跡は、福井県今立郡今立町領家地籍で、服部川の右岸に位置し、高雄山（標高約277m）と尾根続きの八幡山（標高約229m）の間に広がる山裾に立地している。調査当時は山林及び果樹園であった。現在の交通機関では、J R 鯖江駅から南東へ約7km、J R 武生駅からは北東へ約11kmの位置である。

第2節 歴史的環境

現在の今立郡は、嶺北地方のほぼ中央に位置しており、西方には日野川を隔て、古代越前国の国府所在地であった武生市と隣接している。この今立という地名については『日本後記』の弘仁14年（823）に、「越前國言上。丹生郡管郷十八。驛三。割九郷一驛。號今立郡。……以地廣人多也。」とあり、今立郡が823年に丹生郡から九郷一驛をもって独立したことがわかる。この九郷とは、芹川郷（不明）・大屋郷（現武生市大屋付近）・酒井郷（現武生市日野山麓一帯）・味間郷（現武生市の旧味間野村から現今立町岡本付近まで）・中山郷（現今立町国中及び中津山）・舟津郷（現鯖江市鯖江・水落一帯）・勝戸郷（現鯖江市磯部町付近）・服部郷（現今立町服部谷・水間谷一帯）・曾博郷（不明）であり、ほぼ日野川から東側一帯が誕生当時の今立郡の郡域であったと想定される。その後、室町時代（14世紀末）頃には、今南東郡、今北東郡、今南西郡の3郡に分かれており、再び1郡にもどるのは、江戸時代の寛文4年（1664）のことである。

また、越前国府の所在地であった武生市街地と隣接しているためか、早くから条里が実施されていたと思われる、昭和40年代の耕地整理以前の地図や航空写真、地籍図の小字などには、その整然とした条里遺溝をみることができる。

今立町にのこる伝説・伝承には、男大迹皇子（後の継体天皇）の潜龍伝説、越の大徳泰澄に関

する伝説を代表とする多くのものがある。そのなかでも「川上御前」を紙祖神とする越前和紙は、千数百年余の伝承があり、現在では今立町を代表する重要な伝統産業となっている。

このように、今立町には多くの伝説・伝承があるにもかかわらず、その考古学的な調査は決して十分になされてきたとはいえない。過去に斉藤優氏・青木豊昭氏・南越中学校郷土資料センターが報告しているにすぎず、また近年には、今立町誌編纂事業の一環としての調査や町教育委員会が数ヶ所の発掘調査を行ない、その結果を報告しているだけである。

今立町内においては、未だ旧石器時代の遺構・遺物は発見されておらず、縄文時代前期末から中期初頭に至り初めて人間の足跡が確認される。今立町に存在する遺跡については、東桧尾区の毘沙門遺跡から出土している縄文時代中期の土器が、現在までに発見されている最古のもので、以降、弥生時代前期を除くほとんどの時代の遺物が発見されている。その中でも特に数量的にも他の時代の遺跡を圧倒しているのは古墳であり、その分布は今立町の平野部を囲む山麓に広く分布している。古墳は、現在前方後円墳1基を含む約170基が確認されており、南中山地区に全体の約60%が集中している。また、山麓裾部には古墳を築造した人々が居住していたことを推測させる土器の散布地がいたるところで発見されている。

服部川が形成する服部谷においては、前述の毘沙門遺跡において縄文時代中期の土器は発見されているが、それ以降の遺跡はほとんど確認されていない。これは遺跡が存在しないというより、未調査の部分が多いためと考えられる。今回調査を実施した領家遺跡は、このような遺跡の空白地区で、南向きの日当たりの良好な山裾に立地していた。

しかし、町内においても開発行為の増加は必死であり、必然的に発掘調査数の増加につながり、今後さらに今立町の古代が解明されるものと思われる。

以下、町内遺跡分布地図(第3図)掲載の遺跡より、主なものを紹介する。

毘沙門遺跡(第3図・2)

毘沙門遺跡は、東桧尾区字毘沙門に位置し、服部川右岸の山麓(標高50m~60m)の水田中に立地していた。この地より、昭和44年に実施された土地改良事業の際に、南越中学校の生徒によって石鏃、石斧、石核等のほか、縄文式土器(前期末~晩期)、弥生式土器、土師器片、須恵器片が大量に発見、採取された。しかし、遺構は何ら調査されないままに事業が施行されたため、遺構は既に破壊されたと考えられるが、遺跡の存在が確認された。

町内には、当遺跡以外にも、八石・島・別印・岩本・国中・野岡・室谷等の地区より若干の縄文式土器や石器が発見されているが、いずれも細片又は単独出土であり、詳細は不明である。

八石遺跡(第3図・3)

八石遺跡は、月尾川を南東に4kmさかのぼる、八石区の通称「南山」山麓に位置する。この南山より、昭和2年に石剣が発見されている。発見当時の覚書によると、「八石地籍第八号字大門ノ上部、通称大清水山林中腹ニテ、掘り出シタ物ナリ」とある。この石剣は、全長25.5cm、身幅3.7cm、同厚さ1.3cmの凝灰質頁岩からなり、色は暗灰緑色を呈している。刃部先端には、使用さ

れたことによって刃こぼれたものを砥ぎ直したと思われる痕跡がある。さらに昭和47年には、同地区南山中腹で、地主が墓を造るために斜面を削平したところ弥生生時代中期の壺・甕が各1個体出土している。これらの土器が出土した地点の背後の小尾根には、1基の墳丘墓が存在していることから、供献土器と推定される。



第3図 今立町内遺跡分布図 縮尺5000分の1

第1表 今立町内遺跡分布一覧表

No.	遺 跡 名	種別	時 代	No.	遺 跡 名	種 別	時 代
1	領家遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良～近世	17	長泉口古墳群	古 墳	古墳
2	毘沙門遺跡	散布地	縄文・奈良～近世	18	小谷古墳群	古 墳	古墳
3	八石遺跡	散布地	縄文・弥生・中世・近世	19	東樫尾古墳群	古 墳	古墳
4	明福寺遺跡	古 墳	古墳	20	不老古墳群	古 墳	古墳
5	下折走遺跡	散布地	弥生～近世	21	仙源山古墳群	古 墳	古墳
6	見田京遺跡	集落跡	弥生	22	国中古墳群	古 墳	古墳
7	豊広遺跡	散布地	弥生～古墳	23	山室古墳群	古 墳	古墳
8	松明山古墳群	古 墳	古墳	24	室谷庵寺跡	散布地	縄文～平安
9	戸板山古墳群	古 墳	古墳	25	国中遺跡	散布地	縄文～平安・近世
10	亀ノ子山古墳群	古 墳	古墳	26	行司ヶ岳城跡	城 跡	中世
11	松明山19号墳	古 墳	古墳	27	大滝城跡	城 跡	中世
12	陣ノ6号墳	古 墳	古墳	28	城のこし城跡	城 跡	中世
13	岩上神社古墳	古 墳	古墳	29	茶臼山城跡	城 跡	中世
14	西樫尾古墳群	古 墳	古墳	30	玉ノ木城跡	城 跡	中世
15	杉尾古墳群	古 墳	古墳	31	八幡山城跡	城 跡	中世
16	永林寺古墳群	古 墳	古墳	32	御晩山城跡	城 跡	中世

明福寺遺跡（第3図・4）

明福寺遺跡は、藤木区の服間小学校南側の通称「赤土山」と呼ばれる尾根上に位置する。この山から、昭和44年に南越中学校の生徒達が土器を採取したことによってその存在が明らかになった。この遺跡は、近年まで崖面に人工的な溝の断面が確認できたことや、採取した土器等から、弥生時代後期の方形台状墓の可能性が高いと考えられる。

採取された土器は、土器棺の身と考えられる大型の壺と、隣接する他の1基からの高坏である。この土器のうち、高坏は北陸土器編年の月影期に比定され、4世紀中葉の所産と推定できる。

下折走遺跡（第3図・5）

下折走遺跡は、旧藤木区火葬場西方から、水間川右岸までの間に位置している。この地より昭和43年の土地改良事業の後、翌年に行われた排水路工事現場から多数の土器片が発見された。主に壺と甕の破片であるが、いずれも日常生活用具であり、弥生時代後期の集落跡と推定される。この集落跡は、前述の明福寺遺跡と、距離的・位置的、また出土した土器の時代的なものをみても、何らかの関連性があるものと思われる。

見田京遺跡（第3図・6）

見田京遺跡は、南中山地区の谷底平野の東側、標高25～35mの山裾に位置する。昭和60年、当

地に雇用促進住宅建設が計画され、同年、町教育委員会により発掘調査が実施された。

調査の結果、住居跡4棟、溝状遺構7か所、柱穴群多数を発見した。住居跡は、斜面をし字形に削平し、低いところへ土を盛り上げ平坦面を作り、柱を立てる構造である。また、周囲にし字形に削平したときの溝を使ってさらに平坦面より深く溝を巡らし、建物内への雨水等が流入するのを防ぐ、いわゆる壁溝も検出された。

遺跡の時期は、多量に出土した土器から、その最盛期は4世紀後葉～5世紀前半と推定される。また、当遺跡の背後には、戸板山古墳群が存在しており、時期的・位置的にも大いに関連性があるものと考えられる。

松明山古墳群（第3図・8）

松明山古墳群は、赤坂・東庄境両区にまたがる、通称「松明山」に立地する。昭和54年に古墳群のうち2・3号墳を今立町誌編纂事業の一環として発掘調査した。

調査の結果、2号墳は、1辺約14mの方墳で、若干の盛土と地山の削り出しによって築造されている。埋葬施設は、地山を掘り込んだ小さな土壇に、箱形木棺が埋納されていたと思われる。

副葬品は、遺骸頭部付近から、家屋人物獣文鏡1面、管玉106個、扁平小型勾玉18個、胸部東側から鉈1本を検出した。築造時期は、土壇プラン上面で発見した供獻土器が月影期に比定でき、4世紀中葉の所産とすることができる。副葬品の中で、特に家屋人物獣文鏡は、直径10.8cmの小型倭製鏡であるが、内区主文帯に描かれている素朴な文様や内向する鋸歯文がある例は全国的にも数少なく、貴重な資料である。

3号墳は、1辺約25mの方墳で、2号墳の西方に位置する。埋葬施設は、大きな土壇内に割竹形木棺が埋納されていたと考えられる。副葬品は、棺外土壇床面上で、剣・槍先・鉈が発見された。築造時期は、伴出した土師器が古府クルビ式期に比定でき、4世紀後葉の所産と見られる。

戸板山古墳群（第3図・9）

戸板山古墳群は、山室区字戸板に所在し、南中山地区の谷底平野東端で、服部谷入口の山麓尾根上に立地する。この尾根は、従来より地元業者によって土取り場として尾根が削り取られており、そのため、すでに数基の古墳が破壊されていると考えられていた。そこで、昭和59年に町教育委員会が現地調査を行い、今後の採土予定地内にも古墳が存在していることが判明したため、今後も作業が進めると古墳の破壊は確実となることから、古墳保存のための協議を重ねた。しかし、作業計画の中止にはいたらず、昭和60年に町教育委員によって発掘調査が実施された。

調査の結果、古墳は工事予定地内には5基の古墳が存在していることが判明した。墳形は、自然地形によってかなり制約されているが、やや不定形ながらすべて方墳であった。規模は、短辺5～6m、長辺10～11mと小規模で、埋葬施設については、1～4号墳が箱形木棺、5号墳が割竹形木棺であった。

副葬品としては、1号墳で装飾器台、高坏の供獻土器が出土し、1・2号墳間の溝からは鉄刀1振、銅鏃1点、2号墳の棺床面から短剣1振、4号からは甕、高坏の供獻土器、5号墳の棺床

面から鉄鏝1点が出土している。

古墳の築造時期については、出土した遺物より、1号墳は4世紀後葉、2号墳は5世紀半ばより以前、4号墳は5世紀前半と推定される。加えて5号墳の埋葬施設が割竹形木棺ということを考え合わせると、戸板山古墳群の5基は、1号墳が最も古く、順に2～5号墳へと築造されていたと考えられる。つまり、戸板山の尾根上に、約100年の間に標高の低い位置から高い位置へと順次築造されていたのであろう。

亀ノ子山古墳群（第3図・10）

亀ノ子山古墳群は、定友・杉尾両区の境の尾根上に立地する。この古墳群中の亀ノ子山1号墳（標高82.1m）は、現在町内で確認されている古墳の中で、唯一の前方後円墳である。古墳は主軸をほぼ東西にもち、全長32.8m、後円部長21.2m、前方部長11.6m、後円部径21.8m、同高3.0m、くびれ部幅7.2m、同高1.0m、前方部幅11.6m、同高2.6mの規模をもつ。葺石、埴輪等の外部施設は認められない。墳形は、自然地形を利用して築造されているために、前方部・後円部ともに一部変形している。また、後円部の東南尾根部には、小円墳（亀ノ子山2号墳）が存在し、1号墳の陪塚の可能性もある。築造時期は、正確な調査がなされていないので判断はできないが、前方部長が後円部径の約2分の1に等しいことや、墳形が6:15:1.5となることなど、鼓山古墳（福井市）や山ヶ鼻6号墳（大野市）と同様であり、それらと同じ築造時期と思われ、おそらく4世紀末～5世紀前葉頃と推定される。

松明山19号墳（第3図・11）

松明山19号墳は、東庄境地区の山麓裾部に位置する。この古墳は、いつのころからかこの地一帯に残っている伝説で、蒲冠者源範頼の墓といわれており、その墓の存在は古くから知られていたが、実際には横穴式石室をもつ円墳と思われる。しかし、墳丘の盛土は既に流出しており、石室のみが露出しているのが現状である。

この古墳を、昭和50年秋に町誌纂事業の一環として清掃調査を実施した。その結果、過去に盗掘をうけており、既に開口していることがわかった。さらに前述のように、玄室部分を源範頼の墓として利用されていたため、副葬品等は既になく、僅かに数片の土器と鉄鏝1点が出土したにすぎない。

石室の規模は、長さ4.75m、幅1.5m、高さ2.0mであった。床面中央には、幅0.3m、深さ0.15m、長さ4.4mの排水溝も確認した。古墳の築造時期については、土器の出土量が少なく明確な判断はできないが、古墳時代後期には間違いなく、横穴式石室の形態から陣ノ6号墳（朽飯区）よりやや遅ると思われる。

陣ノ6号墳（第3図・12）

陣ノ6号墳は、服部谷の総社である朽飯区八幡神社境内の本殿背後の山麓中腹に位置する。この山麓には、かつて陣ノ1号墳から陣の7号墳までの横穴式石室をもつ円墳が7基群集していたといわれているが、既に破壊消滅しており、6号墳の奥壁付近が僅かに現存するのみである。明

治13年、本殿再建工事のために拡張を目的として背後の山腹を削平したところ、本墳を経塚として利用した際の埋納遺物とともに、古墳時代後期の遺物が一括して採取された。

古墳に伴う遺物には、須恵器の坏身、坏蓋、有蓋高坏、短頸壺、提瓶等があり、他に土師器の高坏脚部、耳環、太刀片等がある。また、経塚の埋納遺物としては、大永6年(1526)銘のある経筒、五銚片、仏像片が出土している。これら出土遺物は、現在神社に宝物として保管されている。

この古墳の築造時期については、出土した須恵器が6世紀後半の所産であることから、この頃に築造されたものと思われる。経塚は後年この古墳の墳丘を利用して営まれたものであろう。

仙源山横穴群(第3図・21)

仙源山横穴群は、昭和59年、不老区正円寺裏山の急傾斜防護工事の際に、近世墓とともに5基の横穴墓が偶然発見された。報告を受けた町教育委員会は、ただちに工事の一時中止を要請し、発見された5基のうちの3基に対し清掃調査を実施した。その結果、ほぼ完全に残っている横穴は1基(1号横穴)のみであった。

1号横穴は、長さ4.0m、幅1.55m、高さ1.1mを測り、床の周囲には排水用の溝がめぐらされている。この溝は、羨門で一か所に集められ、石の暗渠をおいた下を通り外部へ流出させる構造になっている。また、奥壁付近には、築造の際に鑿を使用した痕跡も認められる。全体的に天井が剥落しているほかは良好な保存状態であった。1号横穴からの出土遺物は全くなく、築造時期は不明である。他の横穴については、3号横穴から近世の土師質の皿が1点出土しており、この横穴は、少なくとも近世には一度は入口が開いていたことが判明した。

丹南地区における横穴群としては、武生市宮谷町に所在する宮谷横穴群があげられるが、今回発見された不老の横穴群と宮谷横穴群との位置関係は、文室川を挟んで相対的な位置にあり、このことから、おそらく仙源山横穴群は、文室川流域に住む人々が造営したものと考えられる。

室谷庵寺(第3図・24)

室谷庵寺は、室谷区の水間谷入口の水田中に位置する。心礎・水煙の発見は昭和35年であるが、長く放置され、近年町誌編纂事業に伴う調査で確認され明らかになった。また、昭和43年の耕地整理の際にも、須恵器片、布目瓦片等が出土していることから、遺構等は確認されていないが、塔をもつ寺院が存在していたことは明らかである。この寺の存続期間は、伴出した瓦片が白鳳期の所産であり、その頃に造営されたものと思われる。心礎・水煙は、現在福井県立博物館蔵となっているが、特に水煙については、北陸地方では初見の鉄製であり、有力豪族の存在を推測させる貴重な資料である。

国中遺跡(第3図・25)

国中遺跡は、国中区の小規模な扇状地に立地し、現状は水田になっている。この地で、昭和58年春、個人による耕地整理が行われた際に、墨書土器2点を含む大量の須恵器が発見されたため、遺跡の存在が明らかになった。また、翌59年度中にも隣接する水田を耕地整理する計画があった

ため、町教育委員会が昭和59年3月と7月に、約200㎡を対象として発掘調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物1棟と溝状遺構が検出された。また、遺物については、須恵器を中心に新たに墨書土器2点が出土した。

掘立柱建物は、桁行3間（5.9m）、梁行2間（4.2m）の南北棟である。柱間寸法は、桁行6尺5寸等間、梁行7尺等間、桁行方向はN43°Wを計測した。この建物に伴う柱穴は、全体的にはほぼ0.6m内外の方形の掘り方をもち、四隅がやや大きく掘られていた。

当時の調査では、掘立柱建物1棟しか検出できなかったため明言はできないが、建物の内部及びその周辺から日常生活用具としての土器の出土が極端に少ないことや、炉跡・焼土が全く検出されなかったことなどを考え合わせると、この掘立柱建物は少なくとも居住を目的とした建物ではないことが推測できる。また、この建物の存続期間についても、柱穴内部や建物内部の床面から出土した土器が皆無に近く、僅かに出土した遺物も図化不可能な細片ばかりであったことから、明確に判断することはできなかったが、出土した周辺の遺物から考察すると、その量的関係から、9世紀初頭～末頃に最も隆盛の時期を迎えたと考えられる。従って掘立柱建物もその時期に伴うと推定される。

行司ヶ岳城跡（第3図・26）

行司ヶ岳城跡は、粟田部と中津山区の背後、行司ヶ岳頂部（標高317m）にあり、別名粟田部城ともいわれている。文献では「河島村・南新庄村北ノ行司ヶ嵩ト申山有之候へ共、城跡之地不相知」『城跡考』とあり、江戸時代には城名しか伝わっていなかったようであるが、昭和53年の町誌編纂事業に伴う調査で確認された城である。城は北東から南東に走る尾根上約500mにわたって、堀切の間に多数の郭が構築されており、町内では最大級の中世山城である。また、この城の築城は、一乗谷や大滝寺へ至る要所の押さえにその目的があったと思われる。

大滝城跡（第3図・27）

大滝城跡は、大滝区大滝神社奥の院背後の尾根頂部（標高321m）にあり、東西に走る尾根が5本の大きな堀切によって区切られ、4つの主郭が築かれている。規模は、東西約400m、南北約200mである。文献では「大滝村ヨリ二十町計辰方山上二城台榎台堀切之形数ヶ所有。」「城跡考」とある。なお、この城には、城のこし城（第3図・28）、茶臼山城（第3図・29）、玉ノ木城（第3図・30）などをはじめとする5つの出城があることが判明している。

八幡山城跡（第3図・31）

八幡山城跡は、東庄境区と鯖江市の境、標高230mの山頂から少し西に下った尾根上に位置する。城は東西に延びる尾根を3つの堀切で断ち、2つの郭を築く簡単な構造である。文献では「庄境村ヨリ5町計子山ニ在、東西六間北五間之所堀切一ヶ所。」「城跡考」とある。また、東庄境区には、「御城山」（第3図・32）「奥白山」「南城山」などの字名が残っていることから、城の存在は確かであろう。城主や築造時期については不明である。

第三章 発掘調査

領家遺跡は、今立町服部谷地区を流れる服部川右岸の南向き斜面に位置し、小扇状地の広い範囲にわたって存在するものと考えられ、約10,000㎡に及ぶものと推定される。この小扇状地は、東西約250m、南北約180m、比高差約20mの規模をもち、現在はそのほとんどが、果樹栽培の畑地として利用されている。

この地に領家地区と河和田地区を結ぶトンネル工事が実施されるにあたり、昭和63年6月、県教育委員会が試掘調査を行なったところ、工事予定地を含む山裾の扇状地のほぼ全面に遺跡が広がっていることが判明した。このことによって、さらに担当部局と発掘調査を前提とした協議を重ねた結果、調査期間を2ヵ年とし、同年9月より本調査を開始した。

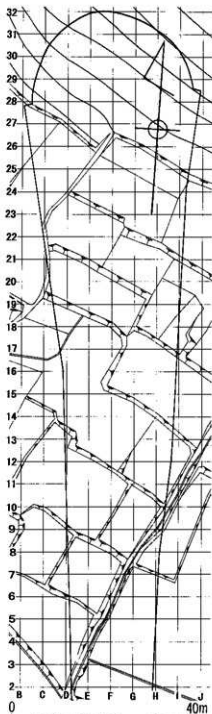
調査を開始するにあたり、調査予定地を5m方眼のグリッドを設定し、東西をA～K、南北を南側から0～34とした。グリッド名は南東優位とした。

調査区域は、工事によって掘削される全てを対象とし、初年度は調査区南側から南北約55m、幅10～12mの約600㎡を完掘し、さらに北側約1000㎡の遺溝検出面まで掘り下げた。次年度は前年度の遺溝検出面まで掘り下げたところから北側全と、初年度にトラック導入路として残した東側幅5mの仮設道路の調査を実施した。

現地調査は、昭和63年9月8日より作業員を導入して開始し、翌平成元年11月20日に全ての調査を終了した。以下、現地調査の流れを簡単に日誌抄でまとめた。

日誌抄

昭和63年 9月 1日 現場にて、今立土木事務所、建設業者、領家区長、調査担当者により調査区の確認を行い、調査区の



第4図 調査区グリッド配置図

範囲を確認する。調査区は既存道路より約50mとする。午後より、トラック進入路の工事を開始する。

- 9月 3日 調査区内の立木の移動。午後より、バック・ホーにより耕作土（表土）の除去を開始する。
- 9月 5日 プレハブ設置。
- 9月 6日 発掘機材搬入。
- 9月 8日 朝より作業員を導入。本格的に作業を開始する。Na10・11E～Gグリッド中に、東西に幅0.3mのサブトレンチを設定。掘り下げて地山の確認を行う。
- 9月 10日 6F・7Gグリッド、第4層（黒色土層上面）で、直径約40cm前後の焼土を確認する。
- 9月 17日 5E・5Fグリッド内で、直径約20cm程度の柱穴を3ヶ所検出。
- 9月 26日 調査区内に排水用の溝を掘る。
- 9月 27日 6～10、各E～Gグリッド内の遺構検出作業を開始する。
- 10月 7日 調査区内で検出した柱穴を掘り下げる。F4区で土器群を検出。
- 10月 15日 F9区出土の土器群の写真撮影。
- 10月 18日 調査区全景及び4区の写真撮影。
- 10月 19日 F9・F4区の土器群の出土状況実測。
- 10月 24日 1～4各E・F・G区、平板測量。
- 11月 4日 土層セクション実測。
- 11月 8日 重機によりNa11～26グリッドまでの表土を除去。
- 11月 14日 4E・4F・4G出土土器、出土状況写真撮影。
- 11月 19日 4E・4Fの出土遺物状況実測。
- 12月 21日 本日で年内の調査は終了する。
- 平成元年 3月 6日 調査再開。
- 3月 9日 20Eにて、溝状遺構らしき黒色土層を検出。
- 3月 15日 Na21～25にて遺構検出作業。柱穴を多数検出したが、掘立柱建物に伴うものとは確認できない。
- 5月 27日 調査区最北部、26E・F・G区より遺構検出作業。20～26各F・G・H区の遺構掘り下げ。20F区の出土土器、写真撮影。
- 5月 29日 16E区より溝状遺構及び柱穴の黒色土を検出。
- 6月 14日 11～13各D・E区に南北にサブトレンチを設定、掘り下げる。
- 6月 23日 19・20各D・E区の土器出土状況写真撮影。
- 6月 24日 19・20各D・E区の土器出土、平板測量。土器取り上げ後、下層より有

舌尖頭器を検出する。

- 7月 1日 24～26各D・E区の黒色土層除去後、遺構確認作業を開始する。
- 7月 8日 25D区において、竪穴式住居跡と推定される遺構を検出する。
- 7月 15日 16各E・F区第4層検出の遺構を実測。
- 7月 26日 調査区全域の写真撮影。
- 7月 27日 8月8日まで調査区全域の平板測量、土層図実測。
- 8月 9日 調査区東側のトラック作業道部分の掘削開始。24C区の竪穴式住居跡の範囲確認のため、西側1m、南北5m拡張。
- 8月 30日 24C区の竪穴式住居跡、壁溝の全体を把握する。
- 9月 11日 24C区の竪穴式住居跡、遺物検出。
- 9月 13日 20～24、各H・I区の柱穴を掘り上げる。
- 9月 21日 トラック作業道の17～20区の遺構検出作業を行うが、遺構は皆無。24C区の竪穴式住居跡、遺物出土状況実測。
- 9月 23日 24C区の竪穴式住居跡内に別の壁溝を検出。別棟の住居跡の可能性を調査。
- 10月 6日 遺溝写真撮影。
- 10月 15日 トラック作業道の10～16区の遺構検出作業を行うが、遺構は皆無。
- 10月 25日 トラック作業道の1～15区の遺構検出作業を行うが、遺構は皆無。
- 11月 10日 トラック作業道を含む調査区全域の写真撮影。
- 11月 20日 ブレハブ・発掘器材を全て撤去し、調査を終了する。

第IV章 検出遺構

今回の調査範囲は、遺跡推定面積約10000㎡のうち、工事予定面積約3900㎡を調査したにすぎない。

今次の調査において検出した遺構は、次のとおりであるが、各遺構は弥生時代後半～平安時代にかけての少なくとも2時期以上で構築されたものと考えられる。また遺構の検出場所については、調査区域の北側、つまり標高の高い位置でその密度が高く、低い位置では土壌及び柱穴が点在する程度であった。

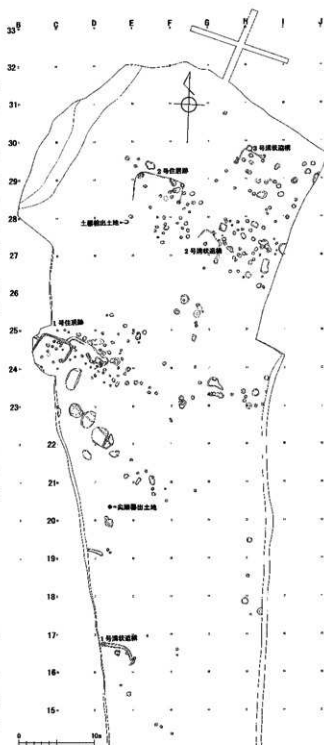
住居跡	2棟
溝状遺構	3条
柱穴群	約300
土器棺墓	1基

このうち、遺構が集中して検出された場所は、C～K・23～29区までの地域、標高43～54mの高さの位置に限定されている。

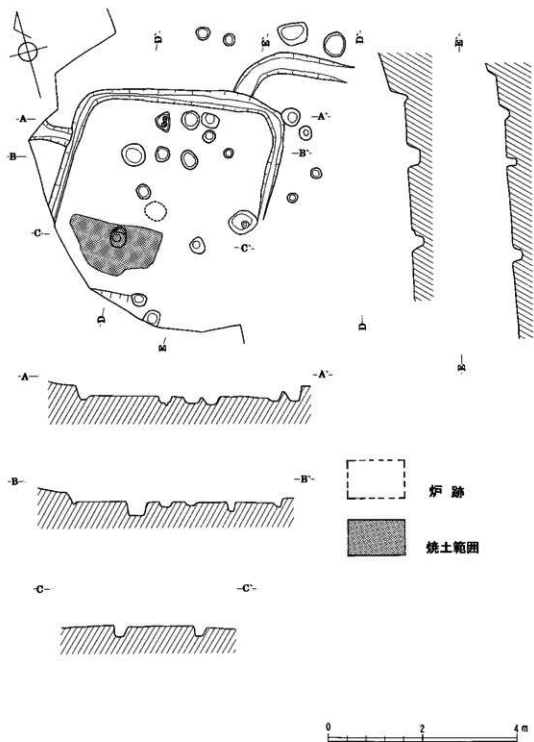
以下、遺構ごとに報告していく。

第1節 住居跡

住居跡は、確実なものとしては、2棟を確認した。いずれも斜面をL字状に削平し、低い所へ土砂を盛り上げ平坦面をつくり、柱を建てている。そのため、検出時には盛った低いところの土は流出してしまい、最終的には地山を削ったところのみ、コの字状に検出した。上屋構造は、



第5図 遺構配置図 14～33・B～J区



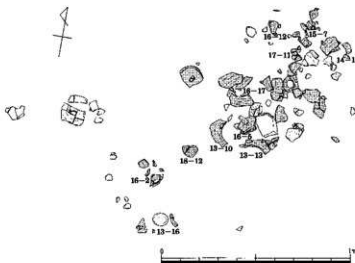
第6図 1号住居跡遺構図

当遺跡では明確に検出できなかったが、4本柱の簡単な構造とおもわれ、周囲にL字状に削平したときの壁を使ってさらに平坦面より深く溝を巡らす、いわゆる壁溝をつくり、建物内への雨水等が流入するのを防いでいる。

1号住居跡

1号住居跡は、調査区の標高47.5m前後で、C24・D24両区にわたって検出した。C24区は当初調査区外となっていたが、住居に伴う溝が調査区外に延びており、規模を確認する必要上、地権者の了解を得て拡張した経緯がある。

壁溝を含めた一辺の長さは約4.4m、壁溝の幅は約0.2～0.4mを測り、やや歪んだ形の隅丸の方形を呈していたと推定される。建物



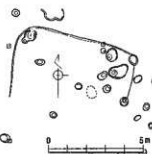
第7図 1号住居跡遺物出土状況図

の方向はN22° Eを測り、柱穴は掘り方約0.3～0.4m、柱穴間の寸法は約1.8mを測る。なお建物内の床面直上より、庄内期の土器が一括して検出されている。また、壁溝の北側にL字状の溝が、西側で拡張区外側に延びる溝が僅かに確認されており、当住居跡に重複する形で、別の住居跡かもしくは拡張された複数棟が存在した可能性がある。

2号住居跡

2号住居は、調査区のF28・G28両区にわたって検出した。当初ごく浅い溝状遺構と考えられていたが、調査の進行にともなってコの字状を呈するようになり、住居跡と判断した。

壁溝を含めた一辺の長さは約3.1m、壁溝の幅は約0.1～0.2mを測る、隅丸の方形を呈していたと推定される。建物の方向はN12° Eを測る。柱穴は建物内では数ヶ所で検出したが、建物に伴うと考えられる柱穴は確認できなかった。なお、壁溝によって区切られた建物の内外での比高差が0.1m以内であるため、当調査以前に何らかの要因のため、かなりの部分が既に削り取られていたと推定される。



第8図 2号住居跡遺構図

同町内の見田京遺跡で検出された住居跡4棟も斜面下方側の壁の立ち上がりから流出しており、同様の状態であった。

第2節 溝状遺構

溝状遺構は、いずれも浅く短い状態で3条確認した。溝内からの出土遺物も皆無であり、時期などを推定することもできなかった。

1号溝状遺構

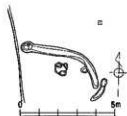
調査区の遺構密集地域より離れた場所、標高43.5m前後の地点で、E16区より検出した。長さは約7.6m、幅約0.3～0.7mを測る。深さは0.1～0.2mを測り、不定形なL字に近い形を呈している。

2号溝状遺構

調査区の遺構密集地域の中、標高52.0m前後の地点で、G27・H27両区より検出した。長さは約2.4m、幅約0.1～0.15mを測り、深さは0.1m前後の浅い溝である。形は柱穴などでかなり歪んでいるが、不定形なコの字状であるため、小規模な住居跡の可能性も考えられる。

3号溝状遺構

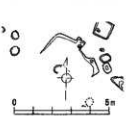
調査区の中で最も高い位置、標高54.2m前後の地点で検出された遺構で、H29・G29両区より検出した。長さは約6.5m、幅約0.1m前後を測り、深さは0.1m前後の浅い溝である。形は不定形なL字状を呈しており、溝の両端及びL字の角の部分に柱穴がある。この溝もSD-2と同様、住居跡の可能性も考えられる。



第9図 1号溝状遺構図



第10図 2号溝状遺構図



第11図 3号溝状遺構図

第3節 柱穴群

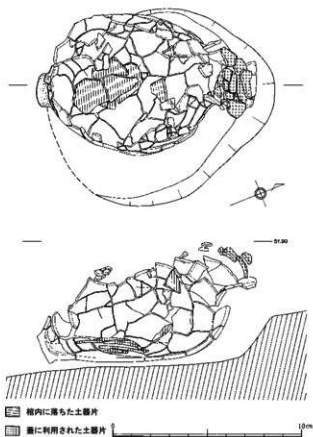
本道跡の調査によって検出した土壌を含む柱穴は、総計で約300近い柱穴を確認した。遺構の検出地点の密度は極端で、1～22区までには土壌・柱穴が約60ヶ所と、非常に密度が薄い。遺構検出面は、当地が元々傾斜面の地形のためか、調査区南側端付近では地山までの堆積が地表面より約1.5m前後の深さであった。柱穴個々の規模は、直径0.2～0.6mと多様であり、形状も隅丸の方形か円形がほとんどである。また、この地区で検出された柱穴については、須恵器を含む平安時代の遺物包含層である黒色土からも検出されており、遺構検出作業の段階で検出できなかった可能性もある。なお、掘立柱建物に伴うと考えられる柱穴は確認することはできなかった。

次に、遺構密集地域である23区～29区については、遺構総数の4/5近くが集中している。この地区は、傾斜面の上方側であるため堆積土が少なく、地表面より0.2～0.4mの深さで地山に達する。遺構はその地山を掘り込んだかたちで検出された。残念ながらSB-1に伴う柱穴以外に建物に伴うと推定される柱穴は確認できなかった。柱穴の規模は、主に直径0.2～0.6mのものがほとんどで、1～22区までで検出している柱穴とほぼ同規模であるが、遺構の深さが全体的に浅いのが特徴であった。

第4節 土器棺墓

土器棺墓は、発掘調査終了間際の10月中旬に、2号住居跡の南西側でE27区中の北側E28の杭b付近で検出した。墓壙は、南に下降する緩斜面に直径45cm前後、深さ約10cmの楕円形であった。棺に使用された壺は、口縁部を北に向け、土圧のために押しつぶされて状態で出土した。壺が立てて埋葬されていたものが倒壊したのか、もともと横たえられていたのかは明確に判断出来なかったが、墓壙の形状、規模から横たえられていた可能性が高いと考えられる。口縁部付近から別個体の土器片が出土しており、位置、大きさから壺の蓋として使用されたものであろう。

この壺は、縄文時代の晩期に属するもので遺跡の主体を占める時期とは大きく遡るものであった。同時期の土器片が発掘区全体から出土しており、遺構は損なわれてしまっているが、縄文時代晩期に周辺では生活が営まれたことを示している。



第12図 土器棺出土状況図

第V章 出土遺物

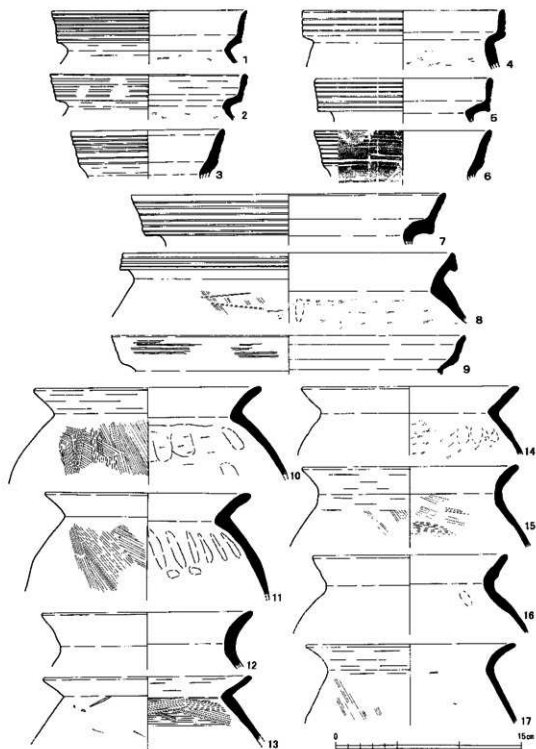
今回の調査では堅穴住居跡2棟・溝状遺構3条と明確な建物とはならなかった柱穴群が検出された。堅穴住居跡からの土器の出土も少なく、土器だまりなども確認されていない。また土器そのものの遺存状況も極端に悪く接合するものも限られた。よって出土した土器量の絶対量と比較して図化できた土器の数は少ない。

第1節 弥生土器・古式土師器

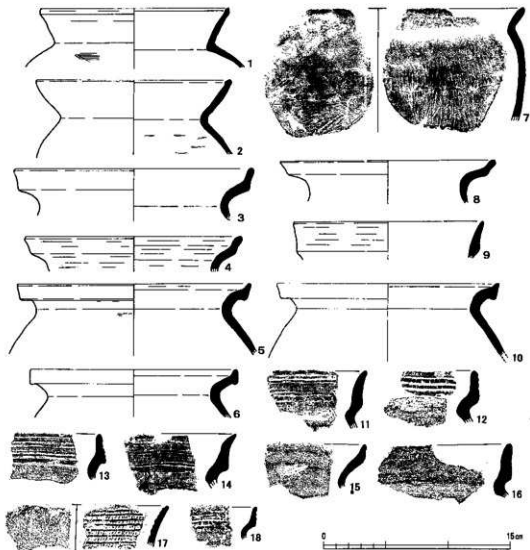
ここでは弥生土器と古式土師器をまとめて記載する。弥生土器と古墳時代の土器である古式土師器は本来別に扱うべきであるが、この時期の北陸は個々の土器では区分できない場合が多いので、前述したように取り扱った。本遺跡ではこの時期の福井では類例が少ない堅穴住居跡があったここからも土器が出土しているが、それらに伴う土器は少ないのですべてをまとめる。今回図化して提示できたのは甕36点、壺25点、高坏・器台19点、鉢5点、蓋1点、舞台・底部14点の合計100点である。出土した土器片は多数あるものの、遺構に伴うものは先の住居跡以外になく、土器そのものの残りも悪いことから図化に耐えうるまでに復元できたものは少ない。また遺跡そのものが山手にあって、石や砂を大量に含む覆土であるためか、調整はもちろん、施文についても十分観察できないようなものがほとんどであり、それらを判断材料とする器種の特定についても不十分なものがあることを断っておきたい。

この時期の北陸の指標となる甕・壺・高坏・器台・鉢の順番に説明する。

甕 基本的に有段口縁・「く」の字口縁・近江系の受口状口縁などのその他の36点を図化した。有段口縁でも擬凹線文の施文があるものには、口縁端部を拡張して三条の擬凹線文を施文するもの（第13図8）から、ほぼ真上に立ち上がるもの（第13図2・4・5、第14図12・13・18）、やや外反するもの（第13図1・3・6・9、第14図14）までの13点ある。有段口縁でも擬凹線文の施文がないものは個々の差が大きく、明らかに先の擬凹線文があるものと同じような形状のもの（第14図9・16）2点のほかには、近江系の受口状口縁に近いもの（第14図3・4・8・15）が4点あって、明確には区分できない。ここでは口縁部の立ち上がりが短く、端部を膨らませるものを近江系の受口状口縁とし、立ち上がりが長く、膨らませないものを北陸通有の有段口縁とした。北陸でも弥生時代から古墳時代に入るとその比率が多くなるのが「く」の字甕であるが、ここでは14点を図化した。口縁内面が明確に肥厚するいわゆる布留甕は1点（第14図2）のみである。口縁端部に面取りがある庄内式の甕に分類できるもの（第14図1）もある。そのほかは頸部が明確に屈曲するもの（第13図10・12・13・14）から、屈曲が非常にゆるいもの（第13図12・17）まであって、個々の違いが大きい。またハケの調整や口縁部の屈曲など、そのほかのものとはやや異なるものも4点あるが、ここでは「く」の字甕として分類しているため古式土師器に含んだ。これら4点は須

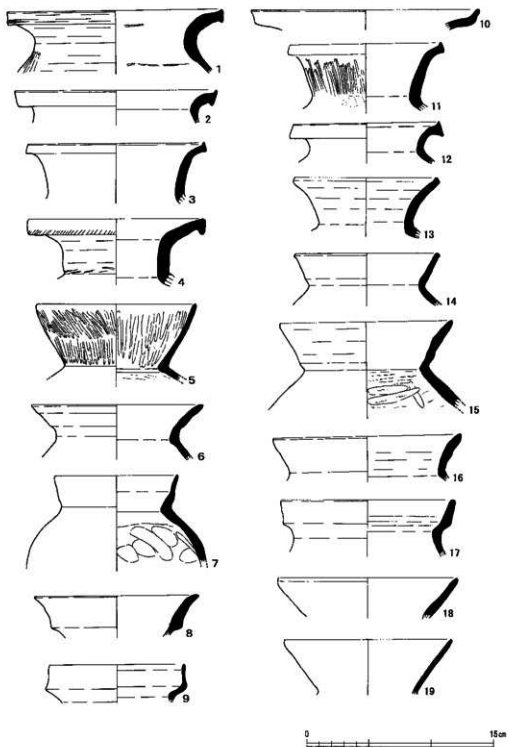


第13図 弥生土器・古式土師器実測図

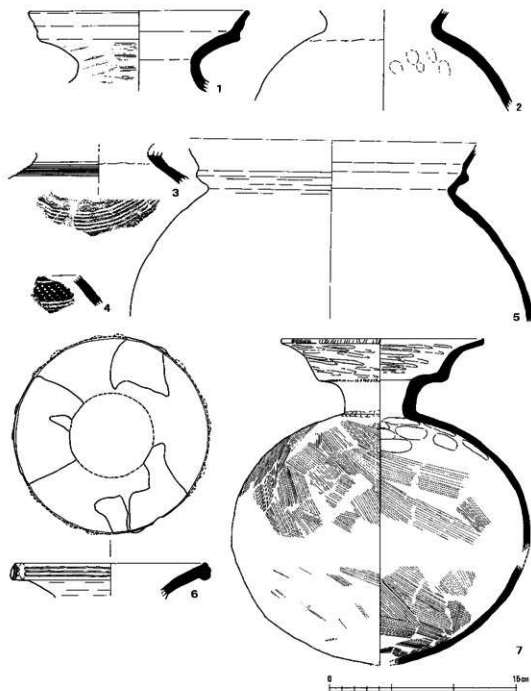


第14図 弥生土器・古式土師器実測図

恵器でも古手の古墳時代後期のものに伴う時期の可能性もある(第13図12・15・17、第14図7)。また「く」の字甕として扱ったが、頸部から口縁部が前述した典型的な「く」の字甕より屈曲が明確ではなく、全体に厚手のもの(第14図5・6・10)があるが、この口縁端部はやや上へ摘み上げるようにするものである。北陸ではこのような口縁部のものは石川県の能登地方に多いものであるが、越前ではほとんど出土が知られていないものである。よってここではそれらと断定することはできない。口縁端部はないが、下端の突出から山陰系に分類できるもの(第16図5)が1点ある。この時期の北陸通有では大型に分類されるものに典型的に存在する。

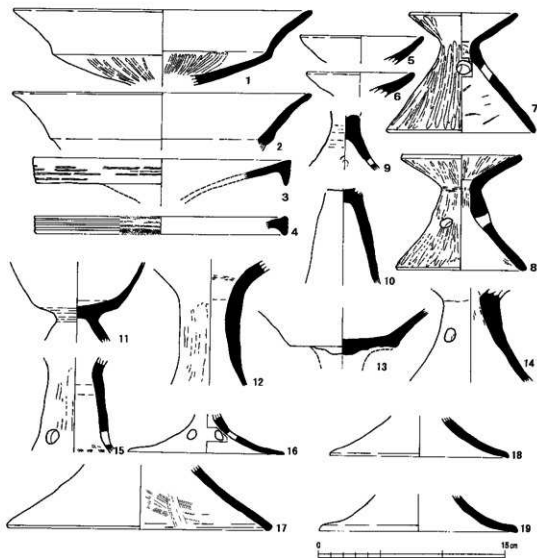


第15図 弥生土器・古式土師器実測図



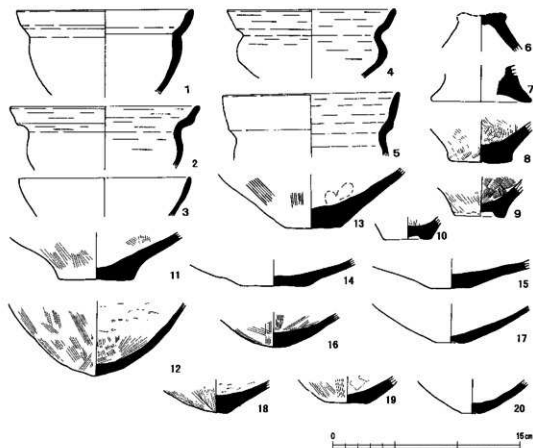
第16図 弥生土器・古式土師器実測図

壺 壺も甕と同じく、有段のものがあるほかは、「く」の字に屈曲するいわゆる「単口縁」と呼ばれるものと、弥生時代後期に主体のある広口壺に分類できるものが多い。また二重口縁も3点



第17図 弥生土器・古式土師器実測図

ある。有段口縁のものは3点と少なく、典型的なものは1点（第15図17）で、有段が形骸化したもの（第15図7）や、口縁端部を丸くするもの（第15図9）などは北陸ではあまり典型的なものとしては考えられていない。「く」の字の口縁は8点数と数は多いが、どれも個体差が大きい。丸い胴部につく典型的な「く」の字のものは3点（第15図5・18・19）ほどである。広口のものは厚みのある頸部がゆるく外反するもので、口縁端部を上下に拡張するもの（第15図1・2・12）、上方へのみ拡張するもの（第15図3・11）、下方へのみ拡張するもの（第15図4、第16図6）の3種類ある。また受口でも口縁が横へ伸びて壺と考えられるもの（第15図10）も1点ある。二重口縁は堅穴住居の床面で出土し、ほぼ全形がうかがえるように復元できたもの（第16図7）は球形



第18図 弥生土器・古式土師器実測図

の胴部に筒状の頸部から口縁が二重に開くもので、口縁端部と二重口縁の立上り下端の2箇所に刻みを巡らせる。典型的な畿内系譜であるが、図上では胴部全面の調整が斜めを基本とするハケ調整となっている。しかし仔細に観察するとハケ調整が潰され消えている部分もあるので、ハケ調整ののちにミガキ調整をしているが、器壁が剥落して観察できないと判断した。口縁部（第16図1）と胴部（第16図2）は接合しないが、同一タイプと考えられるもの（両者の胎土が明らかに違って同一個体とは判断できなかった）で頸部がゆるく外反して開くものである。このほかには口縁部ではないが、壺の模様として頸部近くの胴部に6条の平行沈線を巡らせるもの（第16図3）、櫛描直線に挟まれて刺突列点文を施文するもの（第16図-4）などがある。

高坏・器台 高坏と器台は受け部以外では区分できないものがあり、点数も少ないこともあってここではまとめた。脚部も合わせて15点図化した。明らかに高坏と判別できるものは、坏部の中ほどで屈曲して大きく開くもの（第17図1）と、小型の高杯で北陸では東海の系譜で考えられる口縁端部を欠くもの（第17図10）の2点である。器台は受け部の端部を下方へ拡張するもの（第17図2・3）の2点である。器台には小型器台として別に分類されるものがあって、ここではほぼ

完形のもの（第17図8・9）が2点ある。また同じく小型器台の脚（第17図15）もあるが、脚部と受け部の間が貫通しない。小型器台には貫通するものとしないものがあるので小型の高坏、小型器台のいずれかは特定できない。

鉢 鉢は有段口縁のもの（第18図1・2・4・5）が4点と内湾する口縁のもの（第18図3）が1点の合計5点である。いずれも口径が14cm前後に復元されるものである。ただし内湾する口縁のものは小型の高坏（第17図1）の口縁である可能性もある。

蓋 蓋の可能性のあるもの（第18図6）は1点あるが、ツマミの部分にあたる上が横へ大きく開かないことからそのほかの器種になる可能性もある。

その他に器種としてではないが、上につくものが特定できない脚台が1点（第18図7）と底部片を12点図化した。底部片は平底のものは明らかに厚く、この時期のものとしては蓋以外には考えられない。また平底でも明確に輪高台の貼付ようになって、上げ底となるもの（第18図9・10）が2点ある。一方で比較的薄手のものは底の平坦面を微かに残す程度のもので、やや僅かではあるが上げ底になるもの（第18図17・20）がある。

第2節 古代の土師器

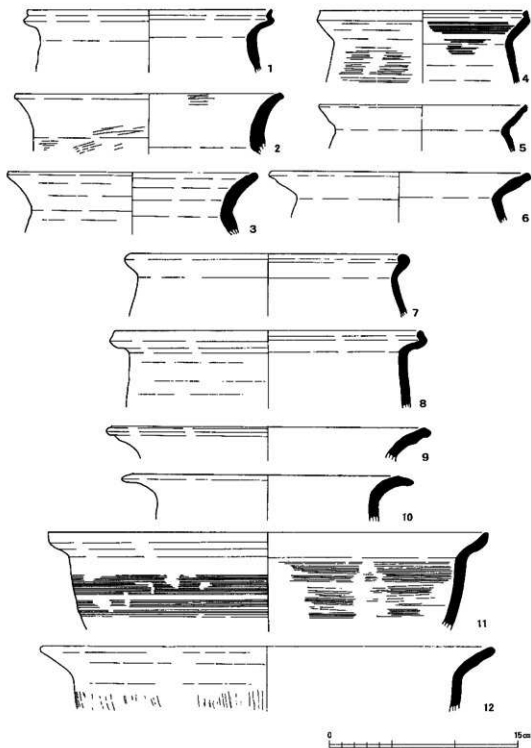
古代の土師器には煮沸具の甕と鉢、供膳具の坏、もしくは埴がある。土師器でも須恵器が伴う時期のものと判断したものを26点図化した。時期が明らかな須恵器の一群には数点ではあるが古墳時代後期に含まれるものもあり、これから考えると土師器にも時期の差が大きいのと思われる。

甕 甕には口径15cm前後、20cm前後、30cm前後のものがあって、大中小の3つに区分できる。いずれも口縁部のみの残存で、胴部の器形は判らないが、他の遺跡の例から長胴で丸底と考えられる。口縁の形状から内側へ屈曲する頸部からゆるく外反して開くものと、端部を摘み上げて立ち上げるものの2タイプにわかれる。前者については頸部の屈曲が丸みのあるもの（第19図2・3・10、第20図8・9・10）と、「く」の字に屈曲するもの（第19図5・6）の2種類がある。後者の有段の口縁は古代の北陸地方の典型的なもので、摘み上げた口縁の内面を平坦にするもの（第19図4、第20図1）、端部を丸くするもの（第19図7・8、第20図3・7）、摘み上げた端部をさらに外へ摘むもの（第19図1）などのバリエーションがある。

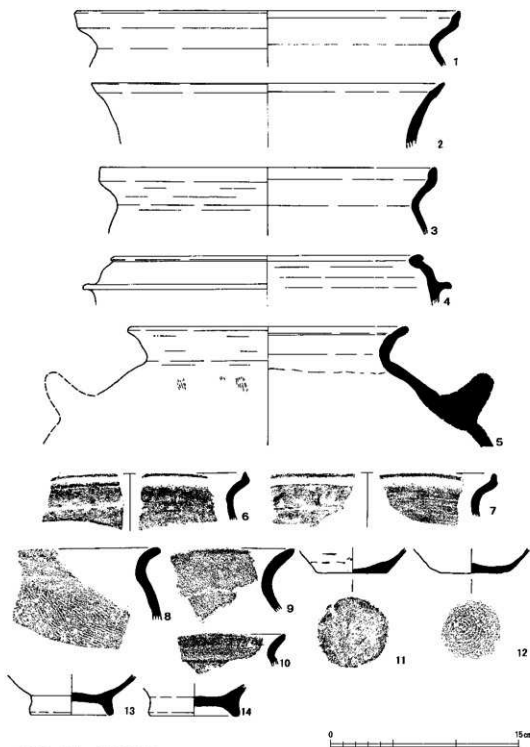
鉢 鉢は2点図化した（第19図11・12）。頸部の屈曲は小さく、口縁も外へ単純に伸びて開くものである。

その他 そのほかに、口縁端部を丸くし、その近くに鈎のように凸帯をめぐらす「羽釜」（第20図4）と、口縁の形状は甕の「く」の字であるが、胴部上半に把手がつくと想定されるもの（第20図5）などが1点ずつある。また平底の底部のもの（第20図11・12）は小型の長胴甕のものである事例があって、埴のものではないと判断した。

埴 埴は口縁部まで復元できたものはなく、いずれも高台部分のみ図化できた（8-13・14）。いずれも底部糸切りである。



第19図 古代の土師器実測図

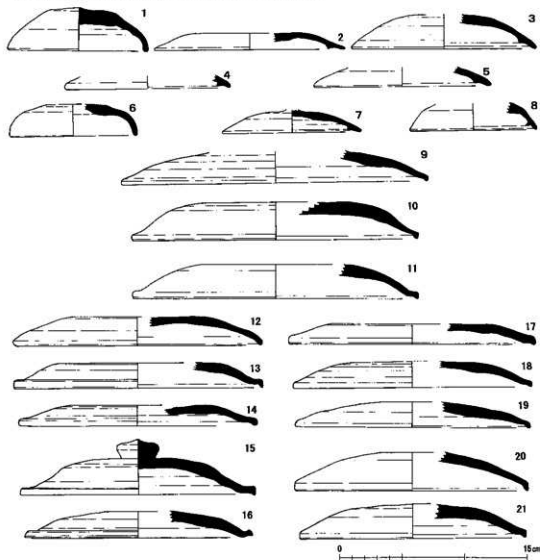


第20図 古代の土師器実測図

第3節 須恵器

本遺跡で出土した須恵器は多くが奈良時代以降の古代のものであるが、一部に6世紀代末の古墳時代まで遡りそうなものがある。それらも含めて、ここでは223点図化した。

蓋（第21図1～21、第22図1～31） いわゆる杯蓋は49点ある（第21図1～21、第22図1～28）。古墳時代のもと考えられるものは8点あって、口縁が直に立ち上がるもの（第21図1・6）と、口縁内面にカエリのあるもの（第21図2・3・4・5・7・8）である。前者の口径は11 cm前後、後者の口径は10 cm前後の小型のものと13 cmを越える大きさに復元できたものの2種類ある。ちなみに前者が6世紀代まで遡り、後者が7世紀代と考えられる。



第21図 須恵器実測図

蓋は基本的にかえりがなくなり、摘みがつくもので、31点を図化した(第22図1~31)。

口径が30cm近い大型のものから、17・8cm前後の中型のもの、11・2cm前後の小型のものの3種類あるが、そのばらつきは大きい。口縁端部に面をつくるが、その先端も丸みのあるものから、先細りするものまである。

ちなみにより新しい時期となる無紐のものは確実には確認できない。

蓋でも短頸壺などの壺に付くと思われるタイプが3点ある(第22図29・30・31)。いずれも摘みの有無は不明である。

無台坏(第23図1~25、第24図1~36) 古墳時代のものも含めて61点図化した。ここには蓋で見つたように、古墳時代の坏身が3点ある(第23図1・2・3)。口径が10cm強あって、蓋でも口縁が直に立ち上がるものに対応すると考えられる。そのほかの無台坏は口径が12cmから15cm前後のものがほとんどである。底部からの立ち上がりも明瞭なものが多く、不明瞭で丸みのある器形のものは意外と少ない。

高台坏(第25図1~16、第26図1~12) 28点図化した。高台坏は口径が17・8cm前後のもの(第25図1~14)と、12・3cm前後のもの(第25図15・16、第26図1~12)の2種類の口径に明瞭に分かれる。底部から口縁部への立ち上がりも明瞭かつ直線的で、端部を外反するものも少なく、その外反も小さい(第25図3・6)。

埴(第26図13~18) 埴としては高台坏のものを6点図化した。6点と数が少ない割には口径にばらつきがある。

高台付皿(第26図19~23) 立ち上がりの短い皿の坏部に高台が付くもので、5点図化した。口径が22・3cm前後のもの(第26図19・20・21)と、17cm前後のもの(第26図22・23)の2種類に分かれる。

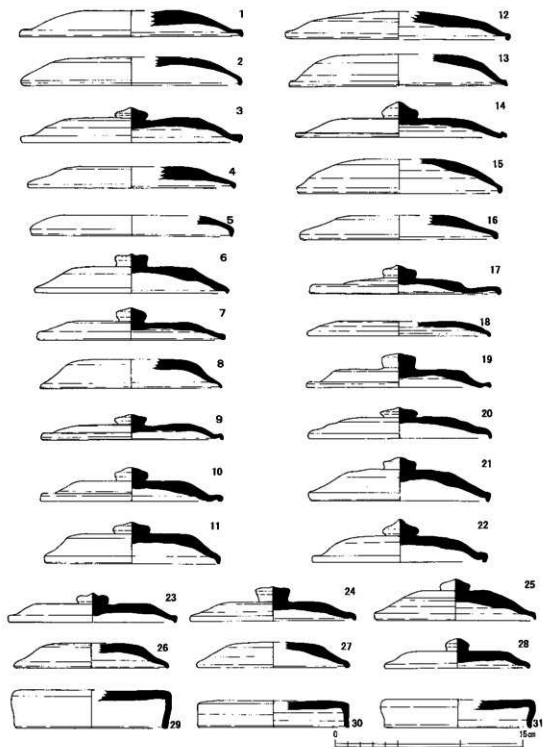
皿(第27図1~30、第28図1~14) 器高の低い皿は44点図化した。口径が16・7cm前後のものがほとんどで、20cm近いもの(第27図1・2・16・17など)は少ない。底部からの立ち上がりも明瞭なものが多く、坏部の立ち上がりも不明瞭で大きく開くものは少ない(第28図2・10など)。

高坏(第28図18~20) 高坏は坏部が残るものではなく、脚の部分のみしか認められなかった。

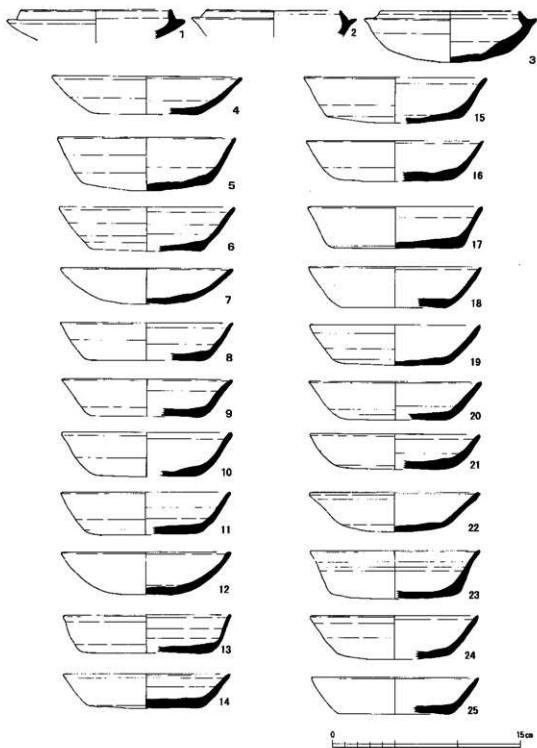
鉢(第28図15~17、第30図5・6) 鉢には口縁が大きく開き、中世の摺鉢の器形となるもの(第28図15)、内湾する胴部上半で小さく屈曲して立ち上がる鉄鉢の器形となるもの(第28図16・17)、頸部の屈曲が弱く短い口縁が開いて端部に面をつくるもの(第30図5・6)の3種類ある。

短頸壺(第28図21~22) 短頸壺は2点あって、肩部が丸みのあるものである。

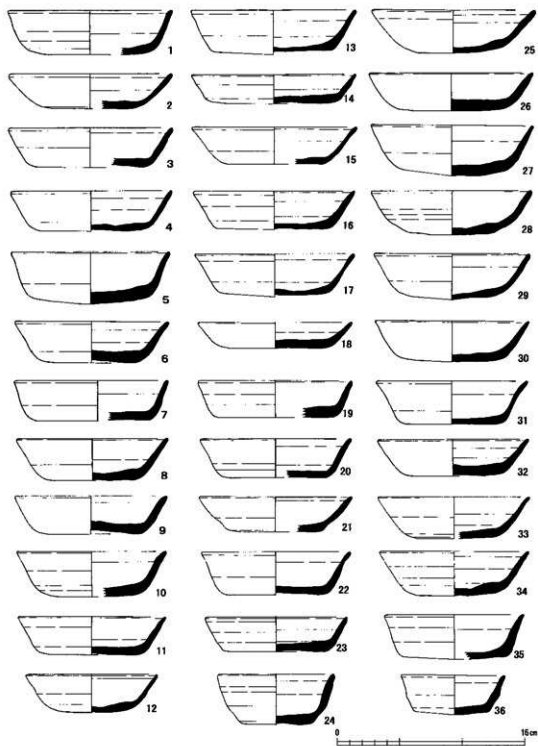
瓶(第29図1~10) 瓶の口縁と思われるもの(第29図1・6)と胴部と思われるもの(第29図2~5・7~10)の10点ある。小型のもの(第29図10)を除けば、いずれも高台が付く(第29図4・5・7・8・9)。



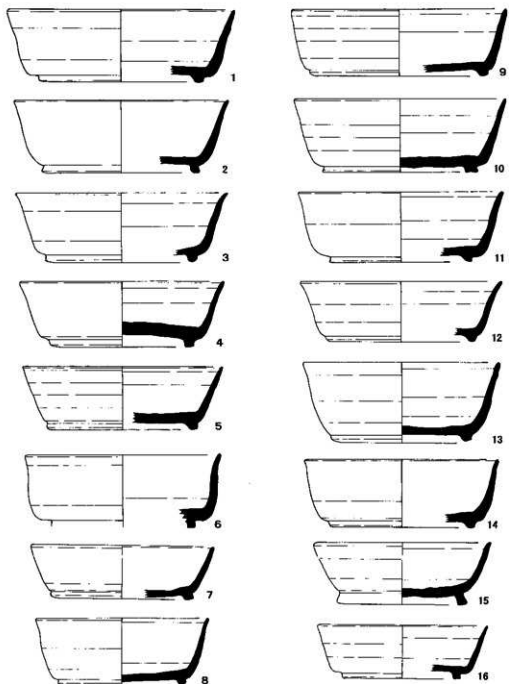
第22図 須恵器実測図



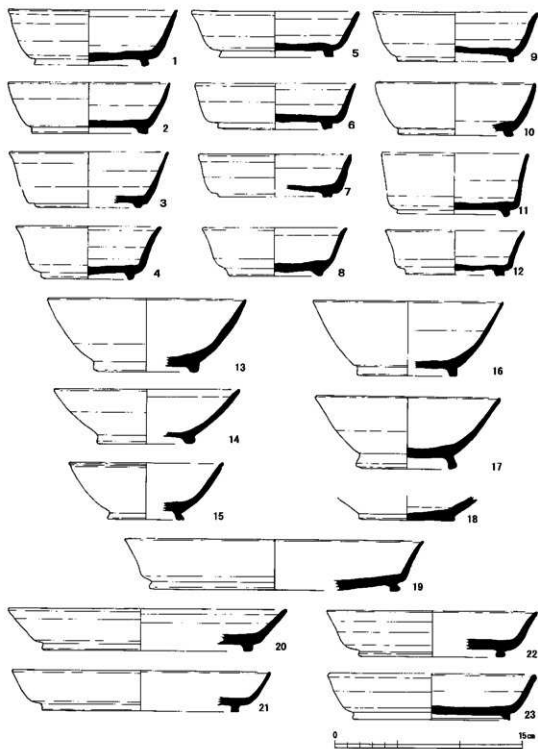
第23図 須惠器実測図



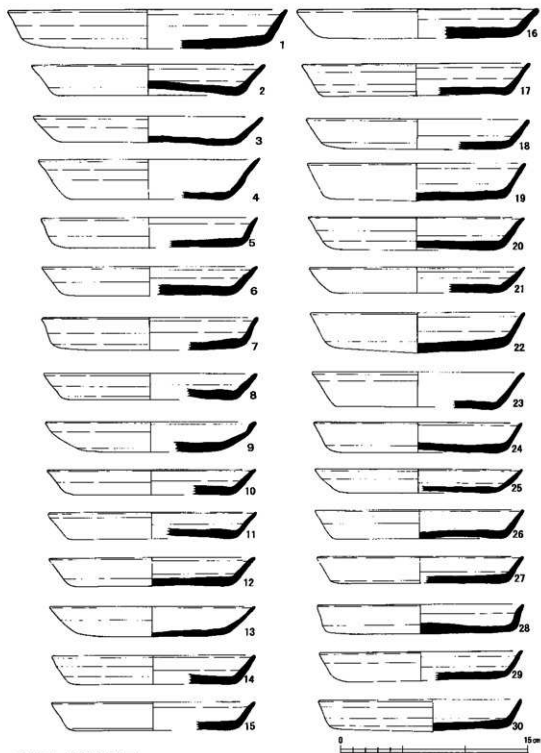
第24図 須恵器実測図



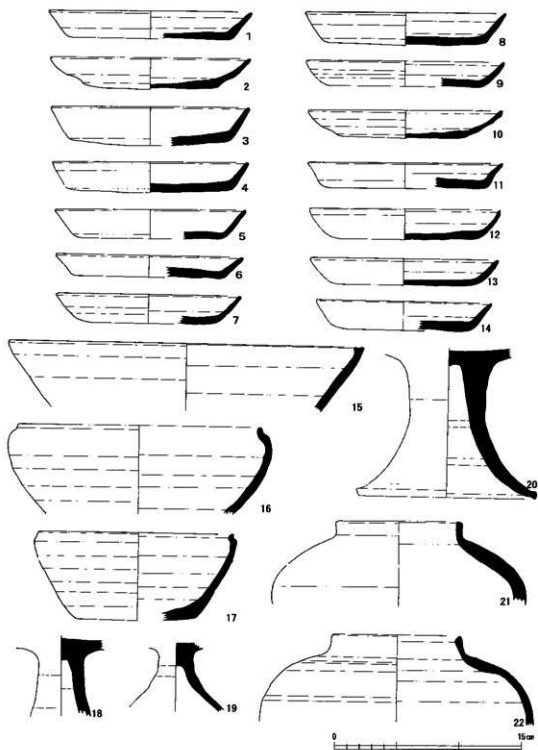
第25図 須恵器実測図



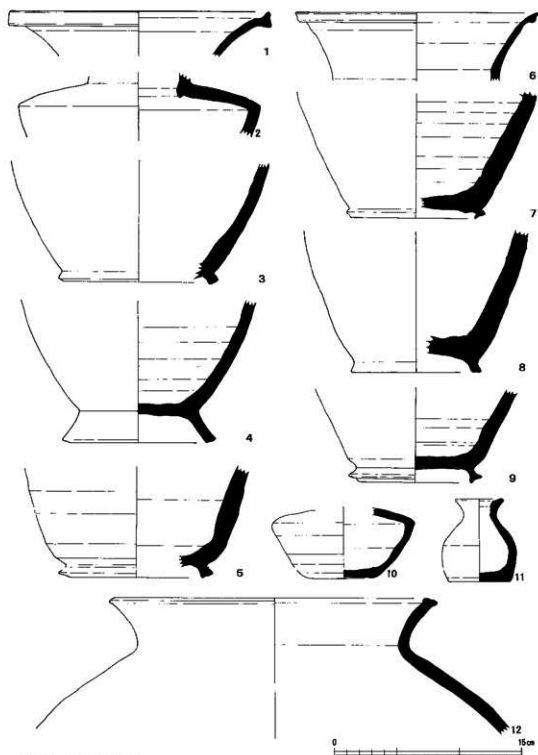
第26図 須恵器実測図



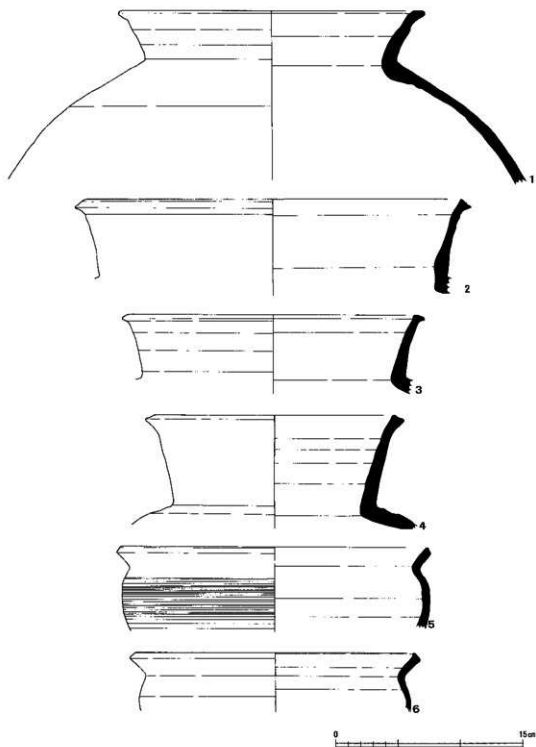
第27図 須恵器実測図



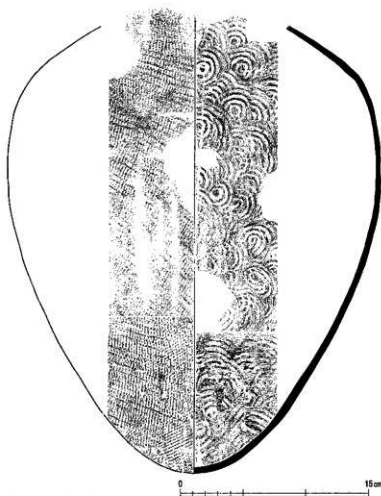
第28図 須恵器実測図



第29図 須惠器実測図

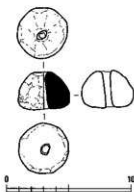


第30図 須恵器実測図



第31図 須恵器実測図

第4節 その他の遺物

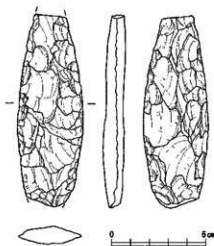


第32図 紡錘車実測図

紡錘車（第32図） 土製の紡錘車を1点図化した。円錐形の頂部を切断したような形状で、その底面の平面形が直径、4.0cmの正円形を呈し、高さは2.9cmを測る。その頂部中央から底面に向かって、内径7の孔が開けられている。胎土には黒色・白色の小さな砂粒が目立たない程度に少量含まれ、若干の気泡があるが、全丁寧にミガキ、平滑な仕上がりとなっている。重量は、見た目より重く14.63グラムを量り、緻密な胎土である。7Hグリッド包含層からの出土で、共存する土器も明確でなく時期は確定できないが古代の土器の胎土に類似することから、同時期のものと考えられる。

小壺（第29図-11） すはまった頸部から短い口縁が外反する、ずんぐりした徳利のような小型の壺が1点あって、ほぼ完形で出土している。

甕（第29図12、第30図1～4、第31図） 甕は口縁部、もしくは胴部の上部までのものと、底部から頸部直下までのほぼ胴部の全形がわかるもの（第31図）の6点が図化できた。甕の口縁端部でも先端に面をつくるもの（第30図1～4）と、内面の上端に面をつくるもの（第29図12）の2種類ある。また頸部には波状などの施文が確認されたものはない。



第33図 尖頭器実測図



第34図 尖頭器出土状況図

尖頭器（第33図）

いわゆる神子柴型の大型尖頭器である。黒色ガラス質安山岩製で、残存長は10.2cm、最大幅3.5cm最大厚1.15cm、重さ40.5gを測る。尖端部が折損し、基部にも僅かな欠損が見られ、復元長は12cm前後になる。最大幅は中央付近で、曲線的な側辺

を持ち、断面はレンズ状を呈する。両面調整で、両側片からの大きな剥離を主とし、小剥離による整形が見られる。

第5節 縄文土器

縄文土器は土器棺（第12図）を除き、すべて包含層から出土した。出土量はコンテナバット1箱分と少なく、破片を主体とする。その時間幅は晩期後葉に限られる。ここでは、遺構出土・包含層出土土器を一括して分類を行い、説明する。分類に際しては、器種・器形・調整などにより細分した。

第1群土器（第36図1・2）

口縁部が直立する砲弾形器形を呈し、外面にナデを施すが、輪積み痕を残す深鉢を本群とする。内面には丁寧なナデを施し、輪積み痕を残さない。1は口縁端部がすばまる。

第2群土器（第36図3～19）

外面に縦・斜位の条痕を施す土器を本群とする。器種・器形・部位などにより細分する。

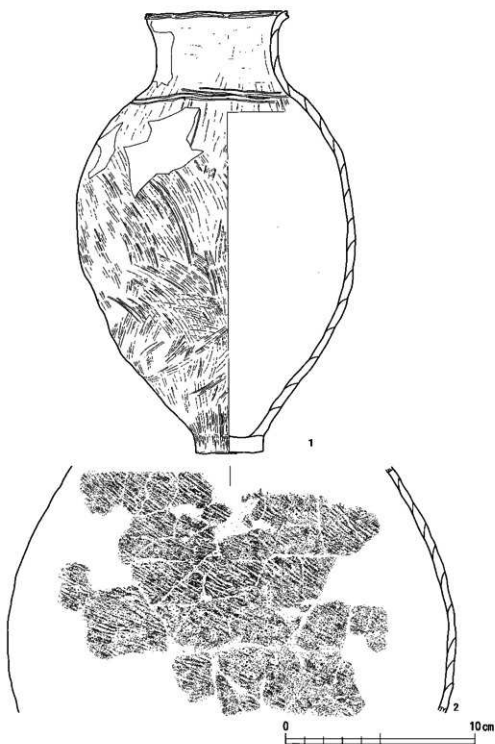
1類（第36図3・5・6）

口縁部が直立する砲弾形器形を呈し、口縁部に横位ナデによる無文部を有す深鉢。口縁端部には、押圧を施すもの（5）、ナデにより丸みをもつもの（3）、すばまるもの（6）がある。また、口縁無文部と胴部条痕の境に横位沈線を施すもの（5）もある。

2類（第36図4・7）

口縁部が強く外反し、頸部でくびれ、胴部がやや張る器形を呈し、口縁部に横位ナデによる無文部を有す深鉢。口縁端部には、浅い押圧を施すもの（7）や、すばまるもの（4）がある。

3類（第35図1, 第36図8～10）

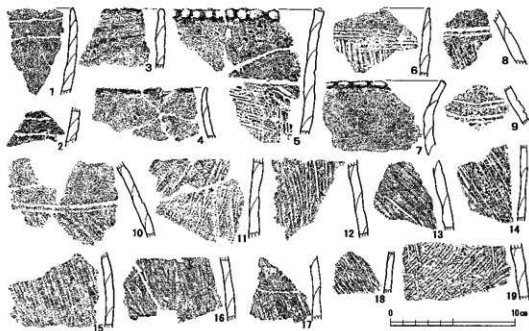


第35図 土器墓出土縄文土器実測図

口頸部に横位ナデによる無文部を有す壺。いずれも無文部と条痕の境に横位沈線を有す。沈線は半裁竹管状工具により施され、沈線断面は両端が深く内部がやや盛り上がる。土器棺に使用された壺は、焼成時のひずみが著しい(第35図1)。口縁部が短く外屈し、直立する頸部は下端でくびれ、胴部は大きく張らず、やや長胴形となる器形を呈す。口縁側端部には、10単位で途切れる横位沈線を配す。沈線の両端は収束部となり、やや肥厚する。口頸部は板状工具による横位ナデを施し、無文部を作出する。頸部下端にあたる無文部と胴部条痕との境には、半裁竹管状工具による横位沈線を1条施す。しかし、丁寧な施文ではなく、沈線は部分的に蛇行し、起点と終点が一致せず、部分的に2条となる。条痕は胴部から底部にかけて横位帯状で5段施す。条痕施文方向は上から下である。底部はやや厚底であり、底面は粗いナデを施す。

4類 (第35図2, 第36図11~19)

胴部片を一括する。多くは深鉢であるが、壺(第35図2・第36図19)も認められる。条痕原体は板状工具を主体とし、幅は約0.6~0.9cmを中心とするが、幅が1.5cmと広いもの(第35図17)、原



第36図 包含層出土縄文土器実測図

第2表 包含層出土縄文土器出土区・層位一覧表

図版番号	出土区	層位	図版番号	出土区	層位	図版番号	出土区	層位	図版番号	出土区	層位	図版番号	出土区	層位
第36図1	30C	5層	第36図5	30D	5層	第36図9	30D	4層	第36図13	111	4層	第36図17	SH	4層
第36図2	30C	5層	第36図6	29D	4層	第36図10	29C	4層	第36図14	29C	5層	第36図18	30D	5層
第36図3	30C	5層	第36図7	6H	4層	第36図11	29D	4層	第36図15	30C	5層	第36図19	30D	5層
第36図4	29D	4層	第36図8	29D	4層	第36図12	29D	4層	第36図16	SH	4層			

体両端が深いもの（第36図13・14）などがある。そのほか、条痕原体として草本結束（第36図18）も認められる。

土器棺の蓋となっていたのは、胴部がやや張る大形の壺である（第35図2）。外面には右下がりの斜位条痕を施す。壺胴部上半片（第36図19）は、左下がりの斜位条痕を施したのち、部分的に縦位に施す。条痕原体は幅約0.8cmの板状工具であり、条線の間隔が狭い密な条痕となる。

以上の晩期後葉土器群のうち、出土土器の主体を占める第2群土器は、福井市糞置遺跡（注1）などで類似例が認められることから、おおむね在地系の土器群と考えられる。第1群土器は、県内において類似例の出土が少なく、不明点が多い。しかし、条痕調整でない点からも、第2群土器とは別の系統土器である可能性が高く、近隣地域で出土する類似土器群の編年的位置（注2）からも、第2群より時間的に下るものと判断される。

注1 以下の文献による。

南洋一郎 1986「36 糞置遺跡」『福井県史』資料編13 考古

田辺昭三・梅川光隆 1986「58 糞置遺跡」『福井県史』資料編13 考古

注2 近畿地方の滋賀県IIIb式、東海地方の稲荷山式などに類似例が認められる。

表3-2 第2群土器・古式土器群・古代の土器群観察表

観測番号	写真番号	形状	部位	出土位置	観察・注記・文様など	口径・底径・残存高 (cm)	粘土	条痕	横溝	備考
第13-図1	第36図9	壺	口縁部	18E 4.上層	外口縁に3本の縦位線文	19.8 4.2 7	赤褐色	良好		
第13-図2	第36図9	壺	口縁部	12F 4.上層	外口縁に4本の縦位線文	15.5 3.5 7	赤褐色	良好		
第13-図3	第36図9	壺	口縁部	12F 4.中層	外口縁に3本の縦位線文	12.7 3.9 7	赤褐色	良好		
第13-図4	第36図9	壺	口縁部	13E 4.上層	外口縁に3本の縦位線文	15.5 4.8 7	赤褐色	良好		
第13-図5	—	壺	口縁部	14E 溝墓平土内	外口縁に3本の縦位線文	13.6 3.4 7	赤褐色	良好		
第13-図6	第36図10	壺	口縁部	16E 4.上層	外口縁に3本の縦位線文	14.0 3.9 7	赤褐色	良好		
第13-図7	—	壺	口縁部	19C 4層	外口縁に1本の縦位線文	24.0 4.0 7	赤褐色	やや不良		断面一部に黒色帯
第13-図8	第36図11	壺	口縁部	14G 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	20.0 5.0 7	赤褐色	良好		
第13-図9	第36図10	壺	口縁部	15E 溝墓平土内	外口縁に4本の縦位線文	20.0 2.9 7	赤褐色	良好		
第13-図10	第36図11	壺	口縁部	24C 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	18.0 7.0 7	赤褐色	良好		
第13-図11	第36図9	壺	口縁部	20E 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	15.8 7.8 7	赤褐色	良好		
第13-図12	第36図11	壺	口縁部	22F 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	18.0 4.8 7	赤褐色	やや不良		
第13-図13	第36図9	壺	口縁部	224D 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	18.0 5.2 7	赤褐色	良好		
第13-図14	第36図9	壺	口縁部	24C 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	17.2 9.4 7	赤褐色	良好		
第13-図15	第36図11	壺	口縁部	24E 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	16.0 6.4 7	赤褐色	良好		
第13-図16	第36図11	壺	口縁部	24D 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	15.2 6.2 7	赤褐色	不良		
第13-図17	第36図11	壺	口縁部	24E 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	16.6 6.3 7	赤褐色	良好		
第14-図1	第36図11	壺	口縁部	24D 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	15.0 4.7 7	赤褐色	良好		
第14-図2	第36図11	壺	口縁部	24D 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	18.4 5.8 7	赤褐色	良好		
第14-図3	第36図10	壺	口縁部	15E 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	16.0 6.1 7	赤褐色	良好		
第14-図4	第36図10	壺	口縁部	12F 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	15.2 5.8 7	赤褐色	良好		
第14-図5	第36図9	壺	口縁部	22D 2層上層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	18.4 5.7 7	赤褐色	良好		
第14-図6	第36図10	壺	口縁部	22D 6層上層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	16.2 3.8 7	赤褐色	良好		
第14-図7	第36図11	壺	口縁部	22E 2層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 6.8 7	赤褐色	良好		断面一部に黒色帯
第14-図8	第36図10	壺	口縁部	224D 6層上層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	17.2 3.2 7	赤褐色	良好		
第14-図9	第36図10	壺	口縁部	24C 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	15.0 2.9 7	赤褐色	良好		
第14-図10	—	壺	口縁部	22D 4層上層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	17.0 5.8 7	赤褐色	良好		
第14-図11	第36図10	壺	口縁部	24D 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 4.5 7	赤褐色	良好		
第14-図12	第36図10	壺	口縁部	21F 2層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 4.1 7	赤褐色	良好		
第14-図13	第36図10	壺	口縁部	22F 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 3.5 7	赤褐色	良好		
第14-図14	第36図10	壺	口縁部	24D 1号住居跡	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 1.8 7	赤褐色	良好		
第14-図15	第36図10	壺	口縁部	18E 4層上層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 3.3 7	赤褐色	良好		
第14-図16	第36図10	壺	口縁部	18E 4層中層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 4.1 7	赤褐色	不良		
第14-図17	第36図10	壺	口縁部	17F 4層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 2.2 7	赤褐色	良好		
第14-図18	第36図10	壺	口縁部	11H 4層下層	外口縁に4本の縦位線文、ハヤ群、ナリ群、内面部分に点状文	— 2.6 7	赤褐色	良好		

第V章 出土遺物

[illegible]

第V章 出土遺物

第 20 期	3期12日	春	口雄根	12F 4層中層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	30.4	4.4	1	深紫褐色	良好
第 20 期	2期12日	春	口雄根	5層上層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	30.3	5.2	1	赤褐色	良好
第 20 期	3期12日	春	口雄根	13F 4層中層	肉内葉の上に葉縁が平順	30.4	5.3	2	灰白色	良好
第 20 期	4期12日	春	口雄根	18C 4層上層	肉内葉の上に葉縁が平順	31.0	5.0	2	深紫褐色	良好
第 20 期	5期12日	春	口雄根	A層下層	肉内葉の上に葉縁が平順	24.0	6.3	1	灰白色	良好
第 20 期	6期12日	春	口雄根	4F 4層上層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	—	3.7	1	深紫褐色	良好
第 20 期	7期12日	春	口雄根	9H 4層上層	肉内葉の上に葉縁が平順	—	3.2	1	灰白色	良好
第 20 期	8期12日	春	口雄根	13F 4層上層	肉内葉の上に葉縁が平順	—	3.5	2	褐色	良好
第 20 期	9期12日	春	口雄根	18C 4層上層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	—	3.5	2	赤褐色	良好
第 20 期	10期12日	春	口雄根	13F 4層中層	肉内葉の上に葉縁が平順	—	2.5	2	褐色	良好
第 20 期	11期12日	春	口雄根	7F 4層中層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	5.4	2.0	2	深紫褐色	良好
第 20 期	12期12日	春	口雄根	4層上層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	4.5	1.8	2	赤褐色	良好
第 20 期	13期12日	春	口雄根	4層上層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	6.4	3.1	2	赤褐色	良好
第 20 期	14期12日	春	口雄根	15C 4層上層	肉内葉の上に葉縁の赤い斑が平順	10	2.5	1	赤褐色	やや不良

* 糖主に26.5では次のように分類した。①糖粒子、糖粒子少量を含む、②糖粒子、糖粒子少量含む、③糖粒子含む。

第4章 现金流量表

[illegible]

第V章 出土遺物

[illegible]

第V章 出土遺物

第 1 期	121	飯沼13	高杉組	109号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	11.7	4.9	2	粘土質	良好
第 1 期	121	飯沼14	高杉組	50号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	11.0	3.8	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼15	飯沼組	110号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	12.0	5.0	11	砂質泥炭	良好
第 1 期	121	飯沼16	飯沼組	14号	熱泥炭へへ入り浸り下層部	4.4	4.7	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼17	飯沼組	21号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	12.2	4.3	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼18	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	10.0	5.0	2	粘土質	良好
第 1 期	121	飯沼19	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	14.6	3.7	11	粘土質	良好
第 1 期	121	飯沼20	飯沼組	125号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	7.2	4.9	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼21	飯沼組	112号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	23.4	4.9	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼22	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	22.0	3.3	3	黄褐色泥	不良
第 1 期	121	飯沼23	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	20.4	3.3	3	黄褐色泥	不良
第 1 期	121	飯沼24	飯沼組	110号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.4	3.9	2	黄褐色泥	不良
第 1 期	121	飯沼25	飯沼組	15号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.4	3.0	2	黄褐色泥	不良
第 1 期	121	飯沼26	飯沼組	108号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	22.0	3.7	11	黄褐色泥	不良
第 1 期	121	飯沼27	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.4	2.4	1	黄褐色泥	不良
第 1 期	121	飯沼28	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.0	7.1	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼29	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.0	3.7	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼30	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	17.0	2.4	1	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼31	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.0	2.9	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼32	飯沼組	109号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	17.0	2.9	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼33	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.0	2.3	2	粘土質	良好
第 1 期	121	飯沼34	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.0	2.2	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼35	飯沼組	110号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.0	2.3	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼36	飯沼組	108号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.0	2.8	1	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼37	飯沼組	29号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	17.6	2.4	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼38	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	17.2	3.0	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼39	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	17.0	2.8	3	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼40	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	17.0	2.0	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼41	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.0	2.2	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼42	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.0	6.3	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼43	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.4	2.4	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼44	飯沼組	112号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.4	1.9	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼45	飯沼組	110号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	18.4	2.2	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼46	飯沼組	21号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.2	2.1	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼47	飯沼組	104号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.2	2.3	1	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼48	飯沼組	50号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.0	2.2	1	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼49	飯沼組	21号上層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.0	2.3	1	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼50	飯沼組	24号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.0	2.2	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼51	飯沼組	24号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部	16.0	2.2	2	黄褐色泥	良好
第 1 期	121	飯沼52	飯沼組	40号中層	熱泥炭へへ入り浸り下層部					

* 魚は次のように分類した。①中若および黒色系稚魚を含む②稚魚およびのちを少量含む③稚魚およびのちを多量に含む

第VI章 まとめ

本遺跡では縄文時代と弥生時代終末から古墳時代前期、そして古代とほぼ3時期の土器が出土している。ここでは検出された遺構と関連させて簡単な検討を行うとともに、周辺の状況とあわせて、これらの時代ごとにまとめたい。

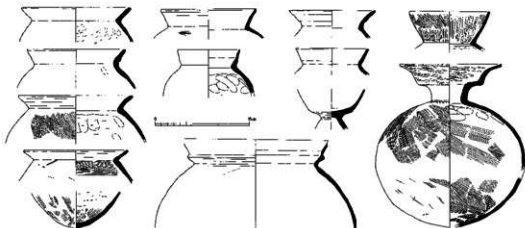
縄文時代 縄文時代の遺構としては「土器棺墓」とされるものが1基確認された。このほかにも土器片が出土しているが、いずれも無文の土器であり、詳細な時期を明らかにするには現段階では不可能である。しかし「土器棺」の1個体がほぼ完形に復元されており、器形から判断すると縄文時代でも晩期後葉で、胴部全面に条痕調整がなされる在地の土器と考えられる。そのほかの破片についても同様に条痕調整のあるものが多く、ほぼこの時期に限定されるであろう。土器には条痕調整があるとしたが、いわゆる貝殻の腹縁を用いて行った条痕ではなく、おそらく板状の工具によるもので、東海地方の「貝殻条痕」ではなく、北陸地方の晩期に特有のものであろう。

ちなみに「土器棺」は古墳時代の住居の近くで出土し、原位置をまったく動いていないとの確証はない。しかし、ほぼ完形で横位に横たわって出土し、大きな破片で蓋をするように出土している状況から離れたところからの移動とは考えがたく、ほぼ原位置に近い場所での出土であろう。その内部には骨片などは確認されていないためそうとは断定できないが、ここでは通例に従って土器棺とした。

ちなみに本遺跡東方約1kmには毘沙門遺跡がある。こちらは町教育委員会が試掘調査を行い、縄文時代前期末から晩期の土器を確認している。水捌けのいい緩斜面であり、同様な立地の緩斜面が広がる本調査区周辺にも、縄文晩期の集落が広がっていたと考えられる。

弥生時代後期から古墳時代前期 この時期は福井県内はもとより、北陸地方各地についても同様に両時期に連続する土器が出土するのが通例である。本遺跡でも明らかに弥生時代後期の時期とされる甕の口縁（第13図8）や高坏・器台など（第17図1・3・4）から、古墳時代前期に特徴的な口縁内面が肥厚する布留式の甕（第14図2）もあって、両者の明確な境は特定しがたい。また甕の主体となる擬凹縁を施文する有段口縁に代表される月影式は、最近の研究で、その一部が白江式として新たに抽出されて、畿内の古墳時代初頭である庄内式と併行するものであると位置付けられている。本遺跡は山麓部の礫を多く含む地山に形成された集落遺跡で、そのせいか土器自体の遺存状況が悪く、詳細な調整まで判るものは少なかった。しかし、1号住居跡からは住居床面でまとまって出土している（第7図）。ここでは二重口縁甕（第16図7）を中心に、「く」の字甕などがあり、ピットからは小型器台（第17図7）も出土するなど同時期を示す土器群には注目される（第37図）。この住居の覆土からはやや先行する可能性のある土器（第14図9・14、第17図2）や、若干遅る可能性も指摘されるような土器（第14図2）もあるものの、土器の伴同関係の類別が少ない本県では良好な資料であろう。それは在地の有段口縁甕が混入するか、残るかの時

期に畿内の古墳時代の始まりを告げる土器である庄内式の各器種を認めることに意義があると考えられる。つまり口縁端部を摘み上げたり（第14図1）、面をつくったりする（第13図14）甕、に二重口縁壺と小型器台があることである。またそこに山陰系の大型の甕（第16図5）や、東海系の小型高坏（第17図11）が加わり、古墳時代初頭の北陸様相を示す基準資料といえる。今後は同



第32図 1号住居出土の同時期と推定される土器群

様に良好な資料の出現を待つ、本遺跡の土器についてその時期も含めた本県での位置付けが必要となるであろう。ちなみにこれまでの今立町、もしくは近隣の鯖江市・武生市を中心とする南越地域の同様な時期の調査では、近江系の受口状口縁土器が各所で出土しているが、今回の調査では少ない。特に1号住居跡では庄内式併行の土器に近江系が伴わないことは、両者の関係を示すと考えられる。

この土器を出土した1号住居跡は、その南東コーナーの隅を欠くのみで、方形プランの4辺が残されていたが、2号住居跡としたものは山手側に「コ」の字状の溝が残されていた。このほかにも「L」字状の溝もいくつか検出されている。しかしこのような遺構には明確に伴う土器はなく、その時期は確定しがたい。同種の遺構は同町内の見田京遺跡でもいくつか検出されており、傾斜地につくられた住居の壁溝が残存したものと考えられている。この種の遺構が多数検出された全国的にも著名な岡山県の用木山遺跡では、高地性集落に伴う竪穴住居であるとしている。領家遺跡は1号住居跡が標高48m付近に位置し、近くの沖積地である服部川周辺が標高38m前後と10mの比高差と、数字の上では高地性集落に分類することもできる。しかし現地に立つと、調査地から沖積面へは緩やかに傾斜していて、とても高地性集落の立地とは言えない。見田京遺跡は標高28～31m前後に遺構が展開しているが、付近の沖積面は25m前後と比高差も3mほどしかない。つまり緩斜面で住居の溝を残す遺構が確認されても、高地性集落とは言えない。むしろ本遺跡周辺では湿潤な沖積地を避けて、山麓部のやや高まった土地を選んだ通常の集落と考えられる。

北陸の弥生時代後期末の月形式とされる時期は、沖積地にも集落遺跡はあるが、丘陵上の水捌けのよい場所に集落が形成される場合が多い。本県でも石川県との県境にある加越丘陵では西谷遺跡や杓子谷遺跡などが発掘調査され、隣接する鯖江市の中央部に位置する鯖江台地でも発掘調査はなされていないが、過去の工事などで竪穴住居の断面が確認され、多数の土器が採取されている。つまり今立町内ではこのような丘陵地がないため、似たような立地の山麓部を選んで、集落が形成されたものと考えられ、むしろ弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、沖積地にもやや高い丘陵状や、本遺跡のように山麓部にも集落が拡大すると解釈するべきと考えられる。

古代 古代は須恵器や土師器などは出土しているものの、まとまって明確に遺構から出土しているものはなかった。また掘立柱建物に復元される柱穴群もなく、集落にともなうものとは言えない状況である。しかし、竪穴住居跡が山手側の壁、もしくは壁溝しか残されていないものばかりであることを考えると、検出された柱穴に削平されたものを加えるといくつかの掘立柱建物が復元できる可能性はある。

出土した土器でも須恵器については周辺での研究成果によってある程度時期を明示することができる。ほとんどの須恵器は8世紀中頃から9世紀初頭の範疇に納まるものと思われる。しかし明らかに主体となる土器よりも先行する時期の数点ほどある（須恵器が第21図1・6・7・8、第23図1・2・3）。もちろん周辺にこれらの須恵器が主体となる時期の集落があった可能性が高いが、古墳などの墓に伴う可能性も否定できない。本遺跡西約1kmの山麓に古墳時代後期末の古墳である陣ノ6号墳からもこれらの須恵器に前後するものが供献されていたことから、本遺跡周辺の山麓部にも同じような古墳か横穴墓があって、それらに伴うものであることも考えられる。この遺跡から出土した須恵器の主体となる時期は8世紀中頃から9世紀初頭のものとしたが、古代の土器として土師器も26点図化している。その多くは煮沸具である長胴甕と鉢である。長胴甕の多くが、口縁に面を持ったり、立ち上がったものが多い。これはこの時期以降に北陸全域に広がる形態の煮沸具で、加越丘陵の栗山崎遺跡では竪穴住居から出土しており、その供伴関係が確認されている。しかしそのほかの時期や越前南部の南越付近では、まだ十分な時期の検討は行われていないとともに、先にあげた特徴以外の土師器甕（第27図2・9・10、第28図8・9・10）が同時期のものか、それとも異なる時期のものかは不明である。

また底部に糸切りのあるもの（第28図12）や高台の付くもの（第28図13・14）は、古代でも本遺跡で主体となる時期の須恵器ではなく、やや新しい時期の須恵器（第24図4・7・12・22）と同じような時期と考える。

最後に これまで、各時代について概要をまとめてきたが、遺構・遺物ともに特異なものは確認されていない。庄内式の土器が北陸でも生産性の高い沖積地ではなく、大きな生産地がないようなこの谷間にこのような土器を持つ住居があることは、その波及のルートが山手にあったことを示すとともに、この後に築造される家屋文鏡を出土した松明山古墳の出現にも大きく関連すると考えたい。

版 圖



①遠景（西の服間小学校校舎屋上から東北側を望む）



②近景（南西側の農道脇より望む）



①調査区北側の29F～30Iグリッド付近（南から）



②24C～24Fグリッド、1号住居跡付近（東から）



①26Hグリッド付近、2・3号溝状遺構とピット群（南から）



②調査区北側28F・29Gグリッド、2号住居跡付近（南から）



①調査区南側、2F・3F～11E・11F付近の完掘状況（南から）



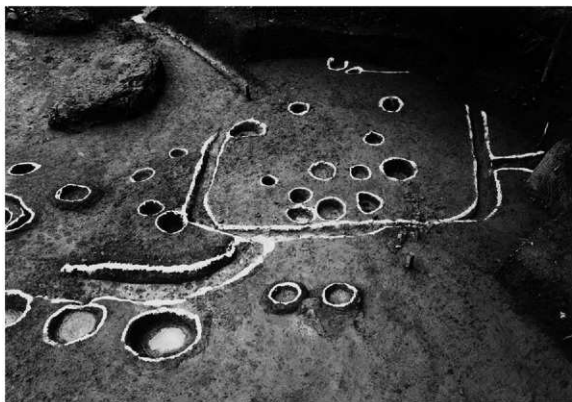
②調査区中央、15E・F・G～24E・F・G付近の完掘状況（南から）



①24Dグリッド、1号住居跡の拡張前の完掘状況（南東から）



②4Fグリッド、須恵器出土状況（南から）



①24C・24Dグリッド、1号住居跡の拡張後の完掘状況（北東から）



②1号住居跡の古式土師器出土状況（北東から）



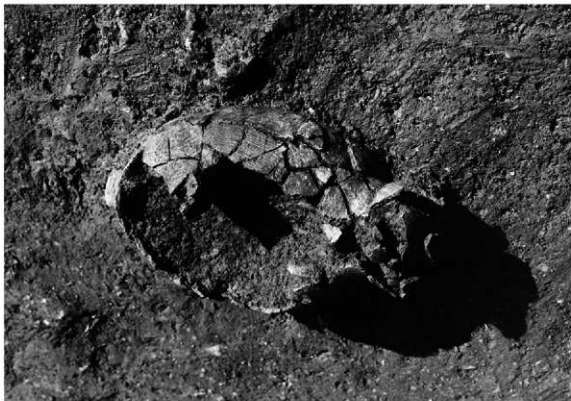
① 28F・29Gグリッド、2号住居跡の完掘状況（南から）



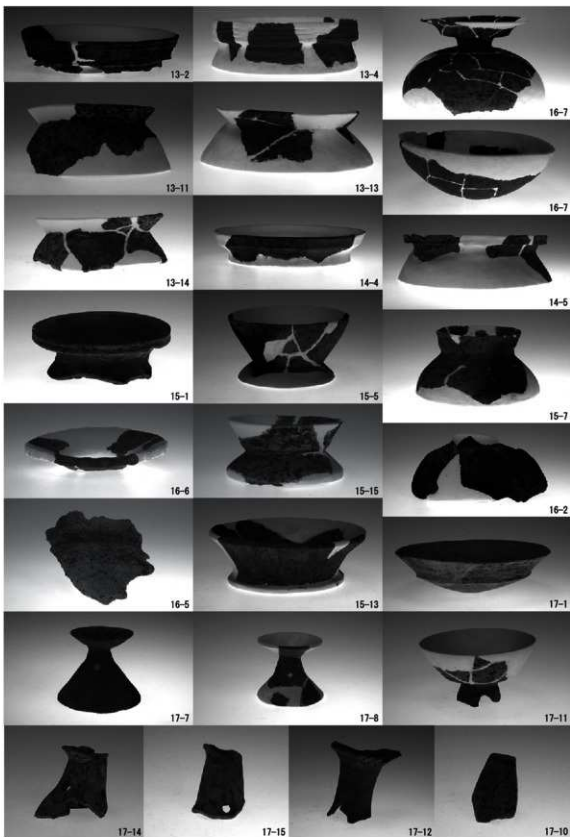
② 231グリッド付近、ピット群（南から）

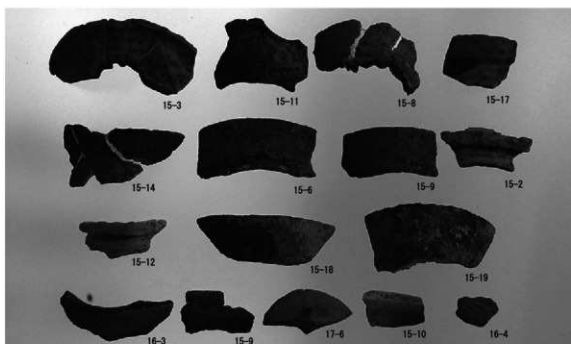
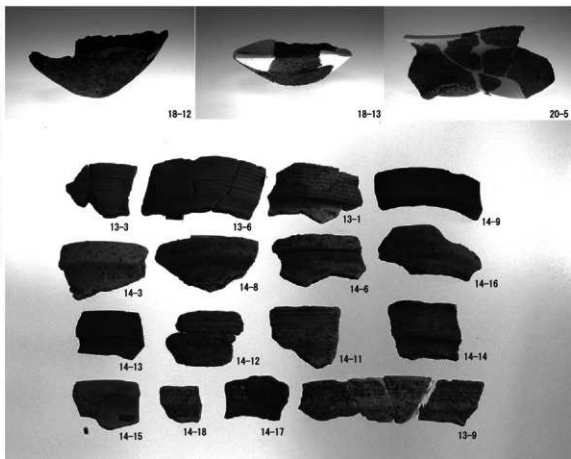


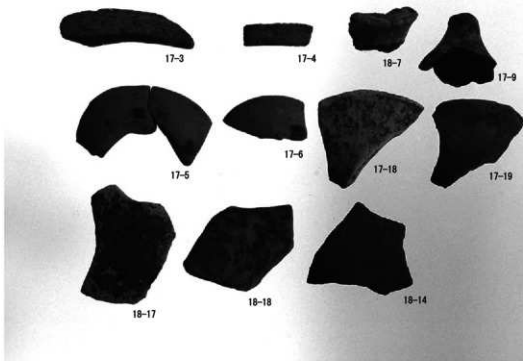
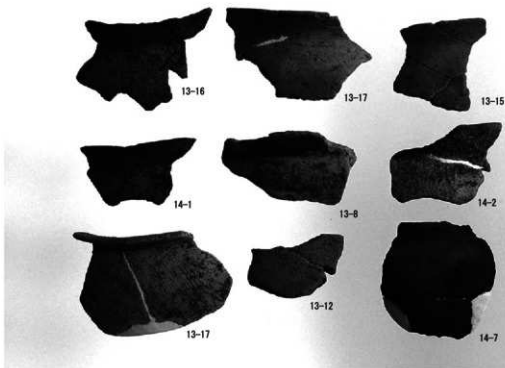
①土器棺の出土状況（南から）

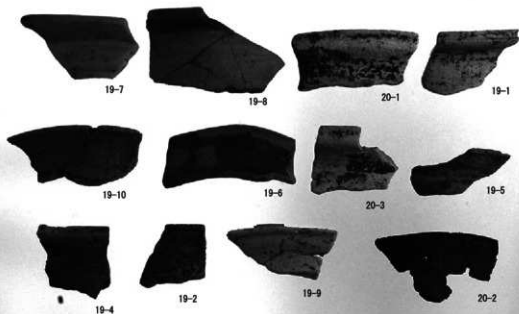
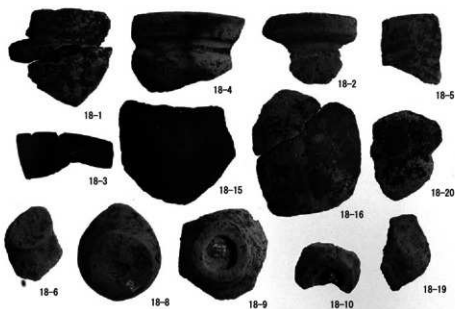


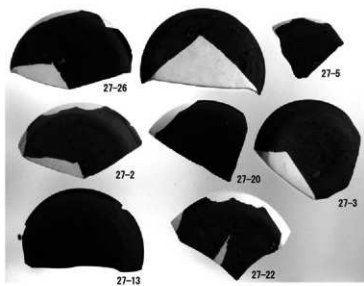
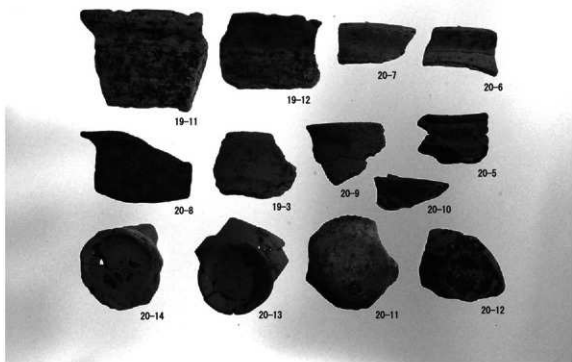
②土器棺の出土状況（東から）

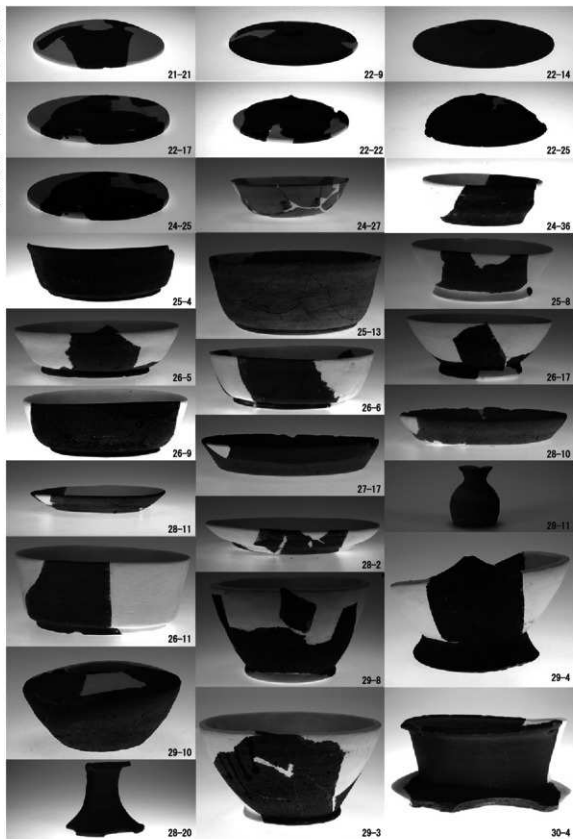


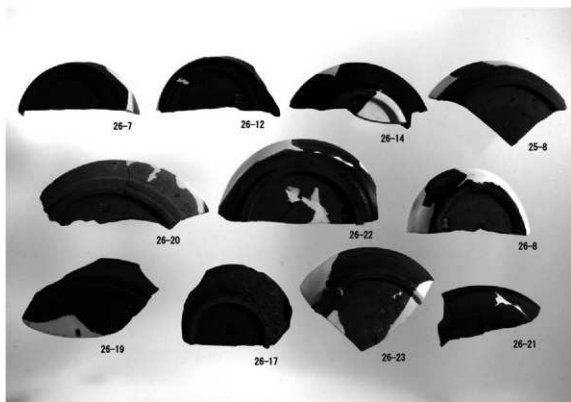
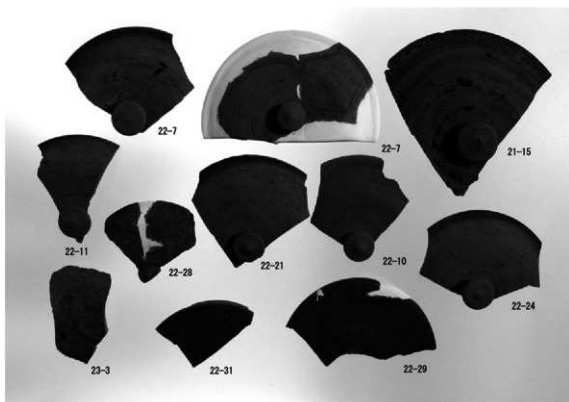


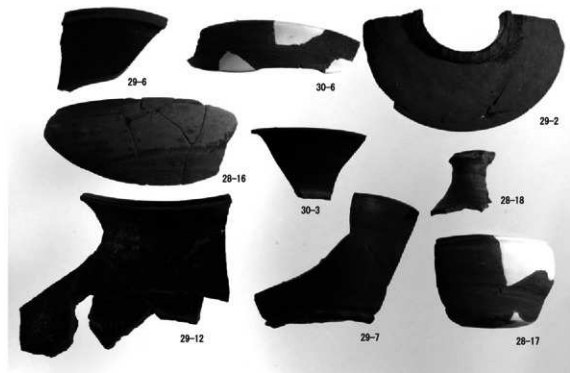












この報告書は、本来ならば平成2年度に刊行する予定でしたが、
諸般の事情により遅延し、今日に至り、関係各位にはご迷惑をお
かけしました。深くおわび申し上げます。

福井県埋蔵文化財調査報告 第17集

領 家 遺 跡

— 一般県道領家河田線改良工事に伴う発掘調査 —

平成 20 年 4 月 3 日 印刷

平成 20 年 4 月 10 日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

印刷 足 羽 印 刷 株 式 会 社